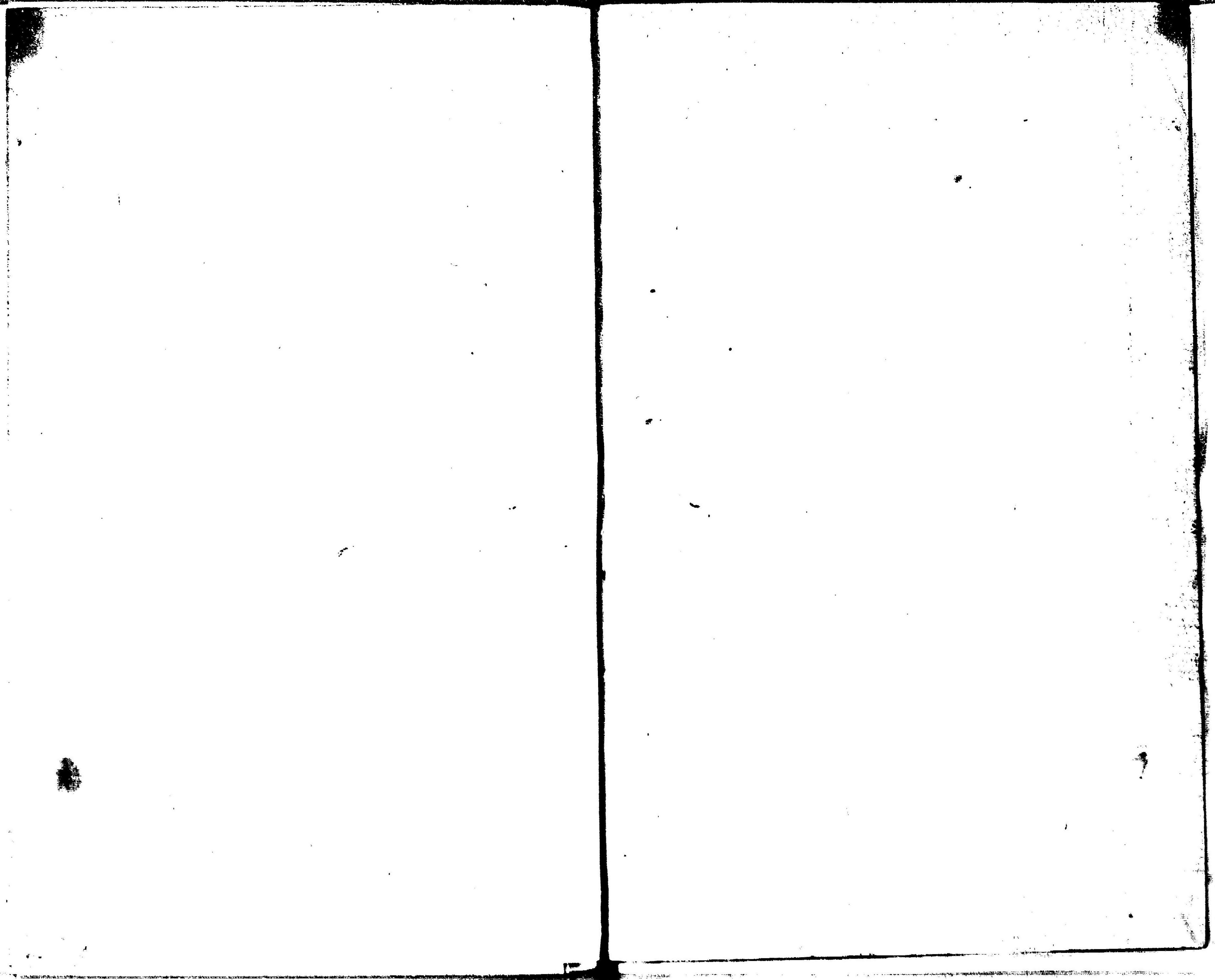


837
10
86

玉
籙

十



多滿太須幾十出卷講本

白山文庫

根岸信輔氏寄贈

鏡胤云。此玉太須幾の書は、去し文化後十年ぶるの始

免て草稿せられぬ候も、全三冊よて、本文も元此神拜の

詞小て、凡ては書體も、古道大意、漢學大意は如き、俗言俚

語の講釋本ありしを、文政七年甲申歳、本文ある神拜

此詞を増し改め、第一卷發題よて、第九此卷學神の御傳

までは、大小増補訂正して、文體をも改られしゆし字、先

祖祭、此處了至てて思ふに旨有とて、本は儘おて關の

れぬ也。後小已り云くと誂へらまかる事も有しうと。已

の思ふ儘も爲し難くて、上木もいぬしか秘心あらば

とある二、年過おるを。此儘おて差置むも惜しく。又門人等此いのでくと云、亦も然る事おれむ。中くお取繕は、又稿本お儘よ上木せむと云、然きば上九冊と。文脈の異なるめ。初稿お儘おれむおれ。但し重複お説。今更不用お條くは。除おころも有。其は其處くお断る。見む人此、心を得てよ。又文化お末。文政の始め頃。専や講譚お前座お勤免た依も。江戸人北村久備。江川安豊らな。斯て此、一冊。まご古史傳第廿五卷以下。おをび幼童お素讀本五部も。昨明治元年戊辰十一月晦日。上木お依き由。

官許を蒙れ。

明治二年己巳二月朔日

從六位上侍講兼皇學所教官第一等平朝臣鏡胤謹誌

○伊吹迺屋主人講本

男鏡胤同校

○次お代くお祖等の靈屋。了向ひ。常は神拜お如く。手を二お拍ち拜みて。但し穢お觸らむ節も。禊事お行ふまで。神拜お考て遠慮おべし。然れど先祖お拜のみは。闕おのら。

遠都御祖乃御靈代く能祖等親族乃御靈總氏此祭屋

鎮祭留御靈等能御前乎慎美敬比家尔毛身尔母枉事有
世受夜乃守日乃守尔守幸閉宇豆那比給比彌孫能次々
彌益々尔令榮給比氏息内長久御祭善志久仕奉志米給
閉登祈白須事乃由乎平祊久安祊久聞食幸幣給閉斗畏
美畏美毛拜美奉留

かく申し竟て頭を上げまゝ平手を二拍拍て額突き拜
むこと上件く此如し。

祭屋とは即ちその靈前俗云ふ佛壇あり此事でし○遠都御祖と

も其家第一は先祖は事おてをなはち大先祖とめ云おて

○代々の祖等とは大先祖よて以下次く代々此事を云ふ

今此言ふカヤと云ハ我を生かしたる兩親ばりてを云と
心得て居るがさうで無い祖父母より以前幾代前でもこ
れオヤと云ふそれ第一をトホツオ ○親族とは遠都祖よ
ヤと云でしこれ古よりの例おて

○次く代々此兄弟さち又母方おちかき親類あちをも云
ふ○總氏此祭屋尔鎮祭留御靈等とて上よ云へる親類と

ち此外お忌挂りあらぬ遠親類縁者此内おても格別な
る由緒ある人々此御靈或も其家お就て功績ゆめし家臣
等よ至依迄も凡て其祭屋此内了祭とて依靈等も漏れぞ
落ぶと云意を以るかく申いでし○慎美敬比とは丁寧お
平伏して申に事○家尔毛身尔母枉事有世受て家お係
れる諸此災難凶事身お付と依病難けが過ち等此おたや

うふ。夜乃守日乃守尔とは。晝夜間斷あく。御守り下されと云ふ。ろ。○守幸閉宇豆那比給比とを。我くが祈り奉る心を。尤ふ聞し召え。御同心よ。御守り下さるやうめと云ふ。ころ。幸へとは。幸福を賜ふ依事を云は。本を正し事。まご殊更ふ。幸ひを賜むらぶとめ。惡事災難を除去下さゆ。則幸牙下ざるゆでし。○彌孫乃次く彌益く尔令榮給比せむ。先彌孫やむ。子れ子を孫せ云ふ。但し是も。俗よむ。ゴと云ぐ。案ハヒコと云ぐ正しいでし。彌孫とは。孫の子れ事云布あれむ。俗よ云曾孫れ事でし。今れ詞を。子や孫は云。及む。曾孫玄孫よ。後く。諸越ふ。孫出子。爲來孫。來孫出子。爲昇孫。と云やうよ。幾代後れ事を。も。あちとく云へど。大抵ハ用無し。皇國おては。唯。大らうよ。

幾代末をも。子と幾代末をも。倍く家門繁榮いゑやうふ。う比古との云り。御守り下されと云心。○息内長久とを。壽命息災を云ひ。○御祭善志久仕奉志米給牙とは。壽命長久子孫繁榮。榮えさせ下されて。御靈等れ御祭を。善ハよく賑くしく。仕りまをるやうふと。願ひ奉る趣。御平和御聞上げ下されはしと。低頭平心して。拜え奉る事を云でし。猶上れ詞どももの事を思合せて。今れ詞の心な悟るが宜しいでし。扱是よ。段く。先祖を祭る事れ心得を申は。ごの。先第一。心得て居ら給むならぬ事ハ。人れ靈魂れ事。あが。きべて人れ靈魂と云ものは。靈れ眞柱。おめ申。と依如く。千代常磐。おあくる事なく。消る事なく。墓所

をあれ。祭屋ツツリヤも何き。其祭る處ところもきつと居る事ことで。夫それもか
れ顯アキラカと幽カミの牙アハごてがあゆ故ゆゑ。此方こゝよこゝとも。其形カタチちを見
ゆ事能アタマはままる先方アタマよよゆ。親シナしくもれを言ことかけると云いふ
ととも。おらぬ訣ワケでハ有あなれども。時ときとしてしても。形カタチをめ現あらじ。は
と誨サトし言ことなどなどもいぬ故ゆゑも。ままをととつくつくととや心得ココロ辨わり
て。必かならずやめめふ。其常つねる形カタチを見ぬ處ところよよゆ。消きておた物ものぞ。おど思
はれぬ。先祖代せんぞくも云いふ及およばぬ。家いへも付つくる靈魂たまを。殊ことも大
切たいせつる心得ココロで。外ほかに神かみくの。拜禮らいらいを關かること有ありやも。先祖せんぞに拜
禮らいらいをむ。朝夕あすけ油斷あぶらおおく。懇切こんせつみ致いたささべき事ことでで。抑おさ先祖せんぞ祭まつを。
何なにとと大切たいせつも致いたささべき事ことれ由來よしゆも。先せん始じ免めん。皇孫みまろ邇いにしへく藝ぎ命のみこと

を。此天下このあまたよ御降みくだしあさる。時ときも。神漏岐かみろぎ神漏美かみろみ命のみこと 此神口
三ノ命みと申まをははる。則すなはち皇産靈みまろ神かみの御み 此神口
事ことおおて。皇孫みまろ命のみことれ大御祖おほみそも坐ませせ。 此神口
治免遊ちめんゆうむむはは。先せん以もつ。天神地祇あまのつちを御祭みまつ遊ゆうばばされ終はむお
らぬ御事故みまろ。第一いちよ神籬かみろぎ磐境いわたと申まをははる物ものを御造みぞとあされ
て。御神靈みかみを其その中なかみ御安置遊みまろババされ。天兒屋根あまのこ命のみこと。天太玉あまのたま命のみこと
も。其御祭式みまつ字御傳みまろへななははれて。皇孫みまろ命のみことよ附奉つらりて。御降みくだし
なされああでで。是こゝよより次つぎく火ひく出見いで命のみこと。葺不合ふりあ命のみことれ御世御
世よ。天津御囿あまのつれ御儀式みまつは通とほり。御祭みまつとああははれれとと依よて。御世
れ能よく治ちままととて。何事なにも无なりりととし御事みまつハ。申まをははる迄までも无ないいて
と。叔神武天皇おじかみは御世みまつも至いたりて。固こよより御同様みまつれ御事みまつとと

存じほむるが。其中よ。別段御大事を思召立せらば、御時は。殊小御祈願在らせられざる御事と見えて、後小天下御平安了成ざる時、身見山中と云處に於て、殊更み皇祖天神を御祭に在らせらまゐてし。是全く御賽謝に御事と存じ奉られまゐる。凡て古、何事め、御自身に思召を儘ふは遊むにまゐ。一切皇祖神の御神慮を承て、遊ばさまざる御事字。能く思ひ奉るが宜いでし。又天下を治むる御所業を、御マツリゴトと申はむ。本神祇を御祭に成さば、よと申は御事。古、御祭事を能く御丁寧に遊むは、神祇の御功德に依て、天下太平なとし故。飢饉病災等此患あく。

万民悉く安全よくらしむる事と見えて、有難い事とし、升る。後世祭政一致あど、申はむ。此故と存じ升る。○古、越を始知諸万国も悉く神祭にいたしある様子に聞えて、中おも周礼よ。天子立、宗伯、使、掌、邦、礼、典、以、事、神、爲、上、示、所以使天下、報、本、反、始、也。形ど、をいれ、随分祭に事と見ゆ。然れども、其本に御由緒が、皇國の御傳、此如く、てい故。自然、靈威もよく、信仰も無くあど、事と見ゆ。又右に此事中く以て、一朝一夕よ、申盡さば、事では無いに依て、古史傳を始め、書等了追、委く記さうら。夫らよ依て見るが宜しいでし。抑代に天皇も、神とも神を御坐に御事あつら。御先祖に御神靈をむ。又別段に御崇敬遊ばされある御事。古は、少くも御懈怠ハ无うとし、處彼、儒佛此道渡に來てよ。自然と御粗畧に相成り來れるは。

甚も歎けはし死事小こそ。然もあれど、いふ外因此道の
弘まどいれむとて、親先祖此靈前を粗畧ふし。現在の父母
小孝養字盡さぬを云事ハ。絶て无き理、あれむ。恐ながらも
開卷み稱し奉れる。順徳院、天皇此禁祕御鈔よ習ひ奉りて。
凡家内作法。先先祖事後他事。旦暮敬先祖、出心無懈怠。白地
以先祖出祭屋。及其墓出方。不爲跡。万物隨出來。必先祭出と
云やう小心挂て、日これ靈供物ハ云ふ及むば、何よ依らま。
其時これ珍しき物まよ日くよ出來る物此初穂を備へ家
此吉凶了扱けても、吉事ハ吉事と、其事を申て、先祖等此御
靈を悦むし免。又凶事は凶事此やうよ、夫字善ふ直し給ふ

やう小と祈りてもいとし。又身此程くよ出世して、家此あ不
榮えむ事をめ願ふ事である故。其拜する詞よも。此の如
く。家了を身みも。禍事有せば、夜此守り日此守る。守、幸了ら
扱ない玉い。彌益くよ榮しを給へとは申はてし。万葉此歌
小大名牟知少彦名此神代よ。言繼者らし。父母を見れむ
尊く。妻子見まば。加れしく免をし。云くとあるなぞ。唯古此
眞情此まふく打出たる正歌あ。ほと同じ万葉よ。春草
を。後ハ落易巖あ。此たも小座せ貴き吾君まよ。ほけ柱不
米て作れる殿此如。在せ母刀自面變りせば。あど見えて。父
母を稱慕ひ尊むて詠る歌。いくらも有。扱又吾が師此歌

小。世^ヨに祖^{カヤ}は御^ミかげ忘^{ワス}るれ。代^トはれやも。巳^ミの氏^{ウヂ}神^{カミ}。巳^ミが
家の神^{カミ}と訓^{ヨミ}置^カれましとぞ。此^{コノ}歌^{ウタ}も。世^ヨにれおやと云^{イハ}れと依^ヨ
る。則^{スな}代^トはれ先祖^{センゾ}と云^{イハ}こぞ。其^{ソノ}代^トの先祖^{センゾ}も。我^{ワガ}家^カは氏^{ウヂ}神^{カミ}ぞ
と云^{イハ}れ心^{ココロ}で。各^{オノオノ}くま^マが^カく生^ナれ出^デて。士^シ農^{ノウ}工^{コウ}商^{ショウ}。そは程^{ほど}く小
家^ケ業^{ゴウ}が有^アて。世^ヨを安^{やす}く渡^{ワタ}らひををるも。皆^{みな}そは先祖^{センゾ}の御^ミ加^カ
げ故^{ゆゑ}。一^{ヒト}日^{ニチ}片^{カタ}時^{トキ}め忘^{ワス}るほじた事^{コト}ぞ。依^ヨて。朝^{アサ}夕^{ユフ}怠^{タラ}ら^ズ。孝^{コウ}養^{ヤウ}
を盡^{ツツ}せと云^{イハ}れ心^{ココロ}小^こ。詠^{イハ}れともはてし。天神^{テンシン}地^チ祇^ジは御^ミ惠^ヱみは。
言^{イハ}ふ小^こも言^{イハ}れぬちど大^{オホ}なま^まどめ。夫^{ソノ}を天^{テン}地^チを彌^ミる事^{コト}も。夫^{ソノ}
廣^{ヒロ}く係^かりまはる。我^{ワガ}家^カわが身^ミは親^{ヒト}く付^ツたる神^{カミ}と云^{イハ}る。家^ケ業^{ゴウ}
師^シの歌^{ウタ}小^こ詠^{イハ}れある如^{ごと}く。先祖^{センゾ}さち此^{コノ}靈^{レイ}魂^{コン}で有^アまはる。返^{カエ}

き返^{カエ}は。粗^コ畧^{リョウ}は無^ムいやう小^こ致^チして。近^{チカ}く云^{イハ}る。此^{コノ}身^ミハ先祖^{センゾ}
此^{コノ}神^{カミ}主^{ヌシ}と思^{オモ}ふが宜^{ヨシ}いでし。夫^{ソノ}を神^{カミ}主^{ヌシ}と云^{イハ}ふ詞^{コトバ}ハ。今^{イマ}世^ヨは。
神^{カミ}社^ヤは仕^{ツカ}へて。居^イる人^{ヒト}は。己^ミを云^{イハ}ふ。心得^{ココロエ}てをる。古^{コノ}
く依^ヨて申^{マウ}は。神^{カミ}主^{ヌシ}とも神^{カミ}は大人^{オホタチ}と云^{イハ}こぞ。夫^{ソノ}を神^{カミ}を祭^{マツル}
本人^{ホンジン}と云^{イハ}ふ。どれ事^{コト}で有^アら。其^{ソノ}先祖^{センゾ}は御^ミ靈^{レイ}を祭^{マツル}る本人^{ホンジン}も。
取^{トル}も直^ナさば。先^マ祖^ソは神^{カミ}主^{ヌシ}で。且^{また}は先^マ祖^ソの御^ミ靈^{レイ}は。謂^{イハ}ふ依^ヨ杖^{ツヅク}代^ト。
御^ミめ^ミで。諸^{モロ}越^{コシ}小^こ謂^{イハ}る祭^{マツル}主^{ヌシ}で。己^ミや小^こ依^ヨて。此^{コノ}様^{サマ}ふ心^{ココロ}得^エ
むではあらぬこと。世^ヨも先^マ祖^ソは祭^{マツル}祀^ヒを絶^タさぬやう。赤^{アカ}子^コ
がわしい。此^{コノ}又^{また}は家^ケの大事^{オホジ}ごとと云^{イハ}て。人^{ヒト}を見^ミ立^タて養^{ヤウ}子^コを
爲^スるれも。ア^レハ何^{ナニ}の爲^{タメ}に。是^{コノ}事^{コト}ぞと。根^ネをおして尋^ヒぬれ

む皆先祖此祭也。吾があは跡此祭りをさせむとて。致以事
では有ませむ。夫を子孫と後者が心得違へて。濟ませう
の。人此道で有はせう。右申は如く。此身は先祖此杖代神
主で有、まはから。其出入も心を付て。出て行く時を。只今
他行いゑしはもる。噤し御淋しからうと。暫く御暇を
下されませい。はと行、先よ於て。禍事も无きやう。御守り
下ぎま。又家内も無事でござはやう。いと申て。他出いとい
は。此事。まと歸り來ては。直に靈前よ向ひ。只今歸てましと
ぐ。御かげよ依てま。於行先も恙なく。噤し淋志くおとし
坐おらむと。云やう。ふ心挂る。ぶれが。人此子孫と後者此道

で。曾て以る形容けみよ致を事と心得てを宜く无い。御
よこそ見え給ハ絲きつと其祭屋にお。案小先祖此御靈を。
はし坐はよと故よ。かく致をのでし。我が祭也。此ぬし杖代と頼みよ思はる。者。居らむでは。
淋しく思は。は知れと事でし。迦羅人あがらも。孔子あ
どは。能く此を心得とる人。で有と後故。其先祖此靈前よ
仕ふる状。ぐ。むと斯れ如く。有と見え。かの論語。め。
孔子此神靈を祭也。と後時の有様を記して。祭如在。祭神神
如在。と何とほむ。是を孔子此神祇も有れ。祖先此靈祭
よとあれ。其祭る状を見る。其處ふとむ。其神此形を現
はして。在は。如く。有と云ふ。で。孔子此賢也。心よ。神

此実有る事を知ては、斯く有べき事也。但し是も世間
得違ひをして、祭ること存せざる如くせよ。神を祭るは、神は
在るが如くせよ。孔子は、教の事あると云者、有るさう
でハ、無い。はと雖、蔬食菜羹、必祭。必齊如也。とも有て、孔子は、常小
食する所は、蔬食まじ菜羹、此類といふぞめ。必うやまひ齊
むて。先祖は備へ祭つると云ふやで。此、二條も、孔子は神
を、其弟子ら此親しく見て記を置、こので、加ら人をがらも、
眞は道をこどる人も、かくは如くで有まは、くら、況く御困
かやうあるべきこと也。叔まが先祖をかやう小、大切
小まべき謂を心得ては、況て天神地祇を、粗畧小思ひ奉る
人も、決して無い筈はと。又現は今生てれをし坐親を粗
末小まる人は無く。神を親字大切する心得人も、まが

道は本立は固き人故。その人必君は仕てハ忠義を盡し。
朋友と交りては、信実があ。妻子小對しては、慈愛ある人
と成りか、家事を論じ無いごみ依て、先祖を大切よを、
人ぞある者、此道の本を云はで。なせと云ふ。其先祖を
大切よする行が、則いたある孝行で、孝行ある人小、不忠不
義は行ひをばる人も、決してあは物な。諸越は書よめ。忠
臣は、孝子は門よと出るやも、孝は百行の本なめとも申と
を此事で。さうそは如く。先祖は仕奉るは、道を盡し時
は、かの俗は諺も云ぶとく。神を敬ふに依て、彌く倍く威
光を増し、御靈異を幸り賜を。子孫は禍事あはやう小と。

守り下さる訣で、我が先祖を慕ひ奉る心と。子孫を思ふ先
祖に御霊とかけ親魂相合ふて。家も身め安らうし修まる
事でも。ちなきまよ子を思ひ親心をも最もく有がごま
物で。申はも今更な事ながら。諸越籍おめ。三年よして父
母に懐字免う候と云へる如く。生出してギヤツとうぶ色
を擧ると。先それ懐き抱き取す。あいやばう打まみき。我
身は盛すの過行く事をけし思ふまよ。彼いやしき川柳と
云ふ口吟こふも。這牙バゑて立てば歩免とねや心。を云、如
くはを、み立て。又同じ川柳。能く寐れむ寐るとて覗く
枕がやとめ有る如く。きげむが宜々まよばよいやて。虫れせ

いでち無しうと案じ。寐たう糸む其も苦小病み。能く糸れ
を寐るとて。ぎうの爲はせぬのと。案じ過ごま。親心たう
ひ至らぬ隈あく。扱や、大死く成て。火小近おけむ手找出
し。水小臨をバ足をあぐき。衣服を汚し。まご大切は物を打
まわしかどける類。まべて悪た事。其限を爲きども。憎し
とは思ふま。ぐつく物おと毀せむ。取收免て置うぬ。此方
此鹿相ごなど、自ら責免。障子あぞ破れむ。此を幾およ成
ても。いお迄を兒童に時お如く。いや愛む心を止まじ。貴賤
上下。昔め今も。隔あきを此親情で。かお發句と云物おも。け
をとめや。子に泣く方へ植てゆく。と云牙る如く。田舎に田

うゑ女あどぐ。其、繩手と云ふ子遊を遊ばせて。田を植お、
も。子此居る方へも。我知らば植て行く。又子等此誼諱ふ。親
此出るのも。彼、兼輔朝臣此歌ふ。入の親此。心をやみおら
糸ども。子を思ふ道ふ。まどひぬるる。と詠れたる如く。皆
子思ふ心此切を依よ。人のはしあ無しを笑ふよも心
付うべ。出か々るはて。又万葉集ふ。防人と申て。古へ筑紫
此圀へ御防ぎは爲す。初めて仰せ付らきて。立行く人を見
送つて。其母ある人の詠と依歌ふ。今年去く新島守が麻衣。
肩はまよひを誰う取見む。と有まはる。かあのみよひと云
は。肩のやぶれや云ふ事。一首此心を。我が子ハあせし始

て行く防人どぐ。始老て此事をあふ。はきみも知人もある
まいし。彼が著て行く麻衣の破れと。誰を取ぬふ人
を有まはる。ら。嘸うしあはる事。有らう。寒い思ひをける
ぞ。何らうと。案じ過て詠むご歌で。同じ万葉よ。客人此
ら。吾子育を天此鶴群か。宿り爲し野お霜降
る様此歌も。猶幾らも何れ。又古今集ふ小野。千古と云人
此。陸奥圀此介と云ふ司よ成て行く依。時。其母ある人
の詠ままし。おは。あらち糸此親の守とあひ添ふ依。心
む。このハ關を留おそ。と有る。此等も。殊よ親此心を思ひ知
ばく。何はまぬる歌。有まはる。能く聞覚えて置れる。ぐ
宜しい。其をば。あらち糸と云ふ。親を云の枕詞で。を

をち母と云ふこぞ。叔京よむむ於此囿へ行くふは。逢坂は
關鈴鹿此關あど云ふ。固を此嚴き關所が有て。御用之外も
容易く行れぬ事も。我を此に残りて在れども。我が子を
思ふ心は守りと成て。其身も相添ひ行くや。是はあま
は。關所でも止るべ。其は、通して下されと云は意ぞし。何
とあはまざる歌でも有ませむ。但し此は昔此人むか
で無く。今世の人とても。貴賤上下。みな子を思ふ心も。此
通で。其は昔人此やうも。歌うハ詠絲ど。そは子の長旅よ
立行く時あど。ほをて早くと。一言云ひて。目も涙を浮をこ
る心も。やめて此歌は如丸。親の守めと相添て行く事。其

手を別於時。まゑで早く。と云。一言ぐ。即歌でし。万葉小
グ頭がた撫で幸くあれと。言ひし詞ぞ忘き斯は如く。親を
うぬぬる。と有て。古も今も。家情ハみをお同じ。子我思ふ心は。於きつゑて居るも。れで。其も末期は際まで。
はやうごお依て。彼補正成卿の云ハまゑる如く。人は最期
此一念よ依りて。生をひく事もあふ。親先祖此御靈も。身も
取ては。第一の守護神で有まは。りら。能く祭。て仕。す絲。ばあ
らぬ事。で。家も人。も言ハ。きる訣。此。あ。と。では。無い。康賢王と
云御方。は。母人。此。歌。み。人の子。乃親。も。成。多。ぞ。我。が。親。の。思。ひ
を。いと。た。め。ひ。知。ら。ぬ。と。有。ま。は。げ。家。も。此。通。り。で。親。も
達者。で。居。ら。ぬ。中。は。澤。山。さ。う。よ。其。恩。を。も。思。も。ま。や。う。や

う自分も年取て。子を持て上で。其実情を慰え。親此大恩
此有難い處を知るを申し意ぞし。例此俚しき川柳。親
の恩齒がぬけてから咬をる。と云ふ口吟みも有て。齒此
脱るくらぬは齡よ成てのら。氣此たかくが通例の人情で。且
親此心子知らずでは有れどめ。夫でもまはぬ遅い。俗
此諺云ふ如く。身捨る藪ハ有れども。子此弃後やぢも
無く。世はまゝ。弃子をいぬ者も有きぞ。彼川柳。ひろ
はる。やみおら親を手を合せ。と云ふ依如く。寔は子も捨
らきぬ物も棄捨るれで。夫も老人知らぬ陰に隠れて。其捨
ふ人哉。拜んで居候も知事と事ぞし。万葉集此歌。銀め金

も玉め何せむふ。はされる寶子のまうをやも。と詠る如く。
身もを寶も替難く思ふ子哉。どうもて心から捨られは
せら。又紀貫之ぬし此歌。世此中思ひやれども子をよ
ふる。思ひおはさ依思ひ无きもの。此上あき事と思はれる
で。万葉よめ。上り引とる哉。初を子を思ふ哥も。幾らも有
ま。彼此食をむ子と思ふ也。粟ををば。まして徳は。おど
も詠て。古人此真情見るが如し。古哥も別ある実情ふし。
此ら此事お付ても。万葉集は必心づけて見るべき書おめ
け。人と成てが悪くまば。は依いお。彼ぬもみ見る子を
憎うなうて。繩のける人が恨を志いと云ふが。人此親とる
者此真情ぞ依て。其心して。云までは无々れども。親を大
切みねべき事ぞし。然るを世まは。親を養育ハたぐ。

むごご。其はぐ、み養ふ事哉。恩ふ掛けて云人あどめ有ま
はら。此も。何れ恩ふ挂けき謂が无い。はら自分が生出され
て。さやうふ親は養育め出来る程よ。人と成るを。誰が御
かげご。其即親の御蔭でハ有はせむ。其を思へば。あつて
も親ふをぐ、み育て、購ひとる程は。恩が牙し。あらぬ。
又親を子は。みを受返さうとて。育ては。無く。
家子子ば。愛しいかた。云眞情よ。身替て育て
る事もある。をぐ、を受やう。恩返し。なまやうとて。爲
くれらきあるよ。恩が十倍厚いで。○鍊胤云。あ、お
申さね。あらぬ事がある。夫いま。同じ兩親とは云へぞ。

同母兄弟。異母兄弟あど。古へよ。自然に定め有る事。あて。
猥りなる事を。決して。無う。しを。儒道に。渡り。來て。より。無
法なる理窟を。云者も有。中。甚し。母は。骨肉を。連ね
た。あど。云僻論を。云者め。出來て。母。不孝。れ者。多く。成。は
ら。悪弊。云ふ。迄も。無し。尤。男女。此。上。取。ては。男。を。尊。く。女。ハ
卑。劣。者。ある。事は。是。ま。ご。定。は。る。事。な。れ。ども。子。と。る。者
より。云。へ。ず。兩。親。は。恩。々。同。等。あ。て。輕。重。ある。事。あ。し。凡。て。婚
姻。此。事。あ。就。て。は。儒。論。あ。り。し。以。來。甚。混。乱。し。て。世。人。は。惑。へ
る。事。少。から。ね。取。總。て。此。處。を。委。く。論。置。れ。と。き。ども。此。は
敏。く。西。籍。概。論。あ。め。出。て。板。本。と。成。て。世。に。弘。ま。る。事。あ

中世論

れむ。此處ハ凡て除きぬ。西籍概論ハ中卷廿七ハ丁より扱
未披見て能く思ひ辨ふべし。 叔
まご爰よ。父母兩親ハ恩義同等あるは。云までも无き事な
はぐ。其中ハ少ク男女ヲ就て。辨居べし事ハ也。然るも。唐人
白樂天ハ太行路と云ふ文ハも。人生莫作婦人身。百年苦樂
由他人と云ふ通也。女人ハ其身を一生人ハはりせて。浮
くも沈むめ。夫次第此もので。寔ハ何ヤも不便あるも此ぞ。
太宰純ハ漫筆も。亦ハ樂天ハ太行路の事を云て。婦人ハ
情云云とる事は。言を尚ふる処ハ無く能ぬ云々。中ハ色ハ
ハ二句も尤事ハ依て。人ハ夫ある者。よく察すべき事
ごと云ふは。至極よう氣付付と事ぞ。男子も自然英邁ハ
氣性あるものよて

諸般心ハ儘ハ爲べきの權ハ也。然れども。自ら心易ハ所
め。女子ハ柔和を主として。諸事夫ハ命令ハ。應ふべく。老て
も子も從ふべし。左ハ右ハ心ハ儘ハ。爲し回く。よろが
み心置べき事ある故。心配勞絶ざる事と思ふべし。然
れむよく其内情を察して。其夫とらむ者は。云までも。夫
男子と生れてハ。殊ハ心付て。常ク婦人ハの心を慰む。安
むべき事。
○世人ハ。能く人ハ少む。かハ此恩を見せても。情
を人ハ爲からず。など。心得て。其報ハ受る。故も。以て爲
る。親の子を愛しむ。処ハ。露ハ。あゆも。は。やら。此心な。え。せ
うぞ。あらむ。人ハ。人ハ。情ハ。挂る。時ハ。親ハ。子ハ。を。い。か。く。し。む
心ハ。如く。有。い。物。ぞ。ハ。と。かく。情ハ。人ハ。の。爲。ハ。終。ハ。小
る。事ハ。言。ハ。も。て。行。け。む。私。慾。ハ。た。ち。て。寔。ハ。無。く。其。世
ハ。老。婆。ど。も。ハ。極。樂。へ。往。て。百。味。の。飲。食。を。喰。う。と。云。ハ。世
ハ。鉢。坊。主。ハ。手。ハ。内。々。く。れ。ると。同。じ。心。ハ。を。持。て。居。る。事。ぞ。故
ハ。白。く。无。い。人ハ。の。世。話。を。や。く。始。免。う。ら。其。心。持。て。居。る。事。ぞ。故

そ此恩を挂と人ガ世話がひ無く思ふ思ふぬ行ひても有
と恨みてあれも思知らばどなど、置るやうも成て始を
此深切が無ふあせ且心ある人も然らど始了世話ある
はあの者此恩が牙しを受やうとて、あ事と見えあるあど
と言ひもいと此事どは依て人よ情を掛るあらば心し
て其恩がしを受やうと思ふ世話もせぬが宜いてし。又
人此恩を受けてそれ字返に心も無く忘る人も禽獸ふも
劣て。其は沙汰此限りある事ぞし。昔も拙者あども人ガ
云とも此あう近頃ハ人よ情を挂てぬ夫ハそれぎせよ心
得人よ情を受けてもどこぞでは返さうと思ひ、まさ人よ金
錢あど字貸てやるよも返されやうと思つて貸はと心よ
く無いうら始うらくれる積りぞかしてやり、叔人よ借さ
る物もきつと返に扱もどぞ此とめをれば約しとる
時此間合ハあんどめ何うして覺えば人よ不実を致も
ことガ有る然れむ世も不実あ人も有さうあことごと
思つて居るぞ。此は事此因よ世、人此人よ情を挂る心得
此悪き事を少然れむ子として親をむぐみ養ふ事は恩
ウ申ははてし。然れむ子として親をむぐみ養ふ事は恩

でも無い事。當り前と云ふめ足らぬ事ぞう依て。唯養つこ
ばのせでも足らぬ事もある。謹んで尊び敬ひ。万がよ心を
盡して事牙むでは。人此子とる者此道ガをほめて。吾師
此歌ふ。父母は我が家の神わが神と。心扱くしてい扱け人
の子。と詠わかまほしとが。此歌此心も。人此子とる者此爲
ふも。父母は我家此現人神あるぞ。わが家の我神と仰ぎ奉
べて。かれ及ぶ限り。心此至るかたせ。忠やあ小齋き敬ひ奉
れ。と云ふの心でし。先よ引とる万葉此歌ふ。大已貴少彦名
が等く云し。とあるを。此神世よ。云おぎ々らし。父母を見れ
も。能く思ひ合をべし。か此論語と云漢籍ふも。子游や云ふ
人此孝行此爲方を問とる時了。孔子の答ふ。今之孝者。是謂

能養至於犬馬皆能有養不敬何以別乎。と云まじらぐ。此心
 を。今世の孝と云へば。其親を能く養つておく事を謂ふと
 心得て居るの。夫も孝と云ふ物では無い。犬や馬は畜てお
 いても養ひはせざる。然れば。親も養つさざれば。孝とも
 云へぬ。能く親の事ふるは道なき。敬ハむでむ。ソリヤ
 犬や馬を畜て置くと同じ爲方ごふ依て。眞は孝と云もれ
 でいふいと云は意で。是をあたち吾師は歌を同じ意で。
 まも孟子を云漢籍よ。事孰爲大事親爲大守孰爲大守身爲
 大。不失其身而能事其親者吾聞之矣。失其身而能事其親者
 吾未之聞也。と申さぐ。是ハ尤も事でん。
夫も付彼曾子父子
 此事を引出して申

さぐ。夫も尤でん。其訣ハ。曾子と云人ガ。其父曾曾と云を養
 ふ。必酒肴を用ひさぐ。其食餘りの事を。餘をもぞう致さ
 うと問へど。夫を誰某よか。ハせと申は。やうみ云ふら。
 其通り。曾子此子の曾元ガ。其父曾子を養ふも。同く
 酒肴を進むる。食終りて。残りがある。と問へば。餘リハ无
 しと云。あれた。又仕廻て置て。又進むやうをせむ。是も
 一應ハ尤もきども。凡そ酒肉など云もれハ。とかく人ハ飲
 せさく。進むとき物故。曾子の如くをれむ。曾曾ガ快く思
 ふ事あり。是も志を養ふと云もれ。仕廻て置て。又進む
 るハ。あ。口鉢を養ふと云物で。志なき養ふよゆハ。進む
 物ごと云やうみ評し。斯て其死して後。彼御靈ハ。其處よ
 多。至極尤も事でん。斯て其死して後。彼御靈ハ。其處よ
 おもひ事を辨へて。上ハ云。如く。祭事へ奉る。是ガ孝ハ
 至也と云もれ。則孔子め。事死如事生。事亡如事存。孝之至
 也。と申さ。ハ此事でん。から人さ。心あるは。うやうあ。よ依
 て。況て御困人。と生れて。古の道を。迎らうとほる人も。か

やう无^ナけれむ成らぬ事^{コト}でし。然る^シ世^セに心得^{ココロエ}違^ヒひあ者^{モノ}も。とかく我が成長^{セイカウ}しとる上^ウでは。獨^{ドコ}手^テに育^{ソダ}つとやうに兒^コの^カまきをして。親^{オヤジ}が何^ニぞ一^{ヒト}言^{コト}云^{ハク}ふと。十^{トウ}言^{コト}で返^{カエ}し。甚^シ志^シ死^シも。親^{オヤジ}の對^{タイ}して。お世話^{セワバ}はあらぬなぞ云^{ハク}も有^{アル}と云^{ハク}ふ。已^{オシ}それ生^ナれと儘^トに。鶯^ウが卵^{タマゴ}を生^ウむがしおまるやう。親^{オヤジ}に打^ウ捨^ツて置^{オカ}きああらば。忽^{トチ}ちみ死^シぬので有^{アル}と依^ヨ事を^{コト}は。牙^{キバ}の心^{ココロ}が。父^{オヤジ}。餘^{オソ}りと云^{ハク}へむ不^フ埒^{ラキ}至^シ極^クでし。叔^{オコ}右^ウの段^{ダン}。申^{マウ}に如^ニく。親^{オヤジ}先^{サキ}祖^ソの事^{コト}へるに。道^{ミチ}を盡^{ツク}たまはると。我^{ワレ}が生^ナあしとる子^コも。又^{マタ}其^{ソノ}を見^ミやう見^ミ眞^{マコト}似^ニる。其^{ソノ}如^ニく爲^ナれぬ物^{モノ}と心得^{ココロエ}るでし。夫^{ウレ}は加^カれ弘^{コウ}文^{ブン}院^{イン}に鶯^ウハ。自^{オノ}から子^コ曰^{イハク}くを嚙^{カミ}ると云^{ハク}ふ

譬^{タトヘ}へれ如^ニの訣^{ワケ}で。人^{ヒト}を固^{カタ}よと生^ウ得^{トク}とる性^{セイ}の。皇^{ミコ}産^ウ靈^{レイ}大^{ダイ}神^{シン}れ御^ミ靈^{レイ}に依^ヨて。親^{オヤジ}を我^{ワレ}より尊^{ソノ}た者^{モノ}と云^{ハク}ふ事^{コト}ハ知^チてをる故^{ユヘ}。それ親^{オヤジ}の爲^{タメ}方^{カタ}を見^ミ馴^ナる事^{コト}も。やがて習^{ナラ}ひ性^{セイ}と成^ナて。育^{ソダ}ち上^{アガ}るでし。其^{ソノ}を世^セ間^{カン}を看^ミるに。親^{オヤジ}はオムキのちり。題^{タイ}目^メぐ依^ヨひをばる家^{イヘ}に生^ナれと子^コを。ぞかき佛^{ブツ}くはく。自^{オノ}我^ガ偈^ゲ臭^{クサ}き事^{コト}は。見^ミやう見^ミま孫^{マコ}に。慥^{コト}たる處^{トコロ}を見て。悟^{サト}るは。死^シ事^{コト}で。かやうに我^{ワレ}を見^ミ習^{ナラ}ふやうに依^ヨれ。即^{スナハチ}子^コを教^{ヲシ}ふるは。道^{ミチ}でし。自^{オノ}分の行^{ユク}状^{ジョウ}が。已^{オシ}依^ヨくて。子^コは不^フ行^{コウ}跡^{セキ}を。叱^シ依^ヨむ。親^{オヤジ}が。以^モの無^ム理^リ我^ガ慢^{マン}と云^{ハク}も。れでし。古^コ人の語^{コトバ}に。め。子^コを持^テて。教^{ヲシ}牙^{キバ}さるは。親^{オヤジ}の罪^{ツミ}ぞや申^{マウ}ふ。是^{コト}も。ちる事^{コト}でし。此^{ココ}行^{ユク}状^{ジョウ}まを教^{ヲシ}へと云^{ハク}ふ。

甚心得べき事有る。是亦付て先年仙臺仕藩士。林子平友直と云し人。父兄訓と云物を著して。申しこる趣宜い。必見ゆべ死書あり。其訣を世よ人の子弟ある者。其父兄子弟ある者。幼少より育てられ教へと云こや。何故と云ふ。自然と父兄此行状を見習ふ事。亦父兄とる者。不行跡。亦ては。からぬ事なり。依て。子弟の教。ハさしおき。其父兄とる者。其子弟を教へ。育むる道を教。示され。ハ叶ぬ事あり。然るも。其父兄を教ふ。亦書物と云も。とんや。無い。仍て。其心得。成るべきや。う。小とて。此父兄訓を著せる。由。筆記せり。只一冊。亦て。粗漏ある物。ハ有れ。凡て。ハ愛。之。死書物あり。板本も。世に。ある事。亦れ。む。人。く。求。免。て。讀。味。ふ。べし。猶。此。人。ハ。世。に。爲。道。の。爲。に。成。る。ば。き。書。ども。數。部。著。し。て。計。ら。ざる。災。難。を。受。と。ゆ。事。ハ。有。れ。ども。其。書。等。を。後。世。に。傳。ふ。べく。案。了。能。く。事。務。を。め。知。ま。る。俊。傑。や。云。べ。き。人。なり。然れむ。教。示。と。云。て。眞。此。道。を。あ。ど。ゆ。ふ。は。何。も。迦。羅。人。の。理。

窟を書とる。四角亦文字。讀せるは。う。り。の。教。で。ハ。无。い。然。ゆ。今。世。に。高。い。も。卑。い。め。と。か。く。子。共。此。時。ら。漢。籍。を。讀。習。ハ。せ。る。事。ご。う。餘。り。宜。く。な。い。事。で。我。師。も。何。う。亦。付。て。此。事。ヲ。誨。さ。れ。歌。ふ。め。き。も。む。の。ふ。心。は。く。お。で。飛。の。く。み。か。ら。れ。教。ぞ。人。に。し。く。け。る。と。詠。れ。ま。し。と。う。き。め。む。う。ふ。心。の。枕。詞。さ。く。お。で。や。も。お。げ。り。し。く。大。や。う。あ。ら。ぬ。事。で。俗。子。こ。は。あ。や。れ。と。云。ふ。同。じ。心。ば。牙。の。言。で。し。叔。一。首。れ。意。を。漢。に。教。と。云。物。を。人。を。善。地。方。亦。導。く。と。て。立。こ。る。物。を。き。ども。餘。り。瑣。細。な。物。を。議。論。し。理。非。を。際。や。う。亦。し。私。に。智。を。振。ふ。り。ら。ふ。人。よ。め。も。我。賢。の。ら。む。と。争。つ。て。却。て。人。の。心。

を悪くする物ぞと云ひ心で。寔に此歌に如く能く大倭
心けをわらぬ人。又は兒輩おんど。漢學をしては。なづつく生
ぶ。あやくおあるも。此で。夫はなぜおれむ。世の儒者と立
て。漢籍むうと讀で居る輩さへ。此方け目から見まば。青く
しくて。眞け學者と云者を。吾いまど之を見びと思ふ程の
事も。況て四書五經や。文選や。左圖史漢を讀ぐらおれ
事でハ。いろはけいれ字の片くも。はごおれぬと云程け物
ごあるお。あ、かしこ少ばうと。其義理を慙えざるや。や高
慢お成て。彼は。じのみけ祭礼あど、論語よみ。や。俚き川柳
よ云へる如く。生姜まおと云へば宜いよ。はじかこの祭

礼あど、あびて云ふやうおおめ。其うおれて。何もおめあ
あやくお成て來るから。いつそ親に心かけを淑くして。子
に其を眞似るやうお爲るが。子お教ふは此道で。其ハかの
中庸おも。天之命謂之性。率性謂之道。脩道謂之教。とある如
く。人け人ごる道も。皇産靈大神に御靈お依て。自から生得
て來る物で。漢け書物を讀で後お知る物でも無い。固を
知らんで叶おぬ事ハ。必知て生れ來依。異國は知らず。我が
大皇國に人は。必さうご。扱其生ま得る性も率て行くを。
人の道とも云ひ。其道けあお。をし。牙立て行くを教と云
て。あきは親け爲べき事。漢人け世話お挂る筋のこやで

も無い。其親く此手の廻らぬ處を助けて回る。學者は職分で。此方はいふに處を。それで。夫故。拙者も何ま。人小書物を読ませる事が嫌ひ。夫ハ右申に通りの訣も。よほせても。メツタニ至。所まで讀む人も無し。おるく。と。讀みぢうけて。をかし。お者小成るのら。此事で。そ。まで拙者ハ一人で書字讀で。其學び得と。依眞は所を人み。論して。其字聞取られさ。牙まきむ。宜いやうよ。と云。此方此立と。流義で。必とも。學者小成う。れぞ。思をれ。又。只く我が説く古道。此趣きを聞。魁えて。今日此心得よ。せ。うとは。牙思をるれば。宜しい。其が直よ。學問と云物で。書

物を読む。む。かり。學問と云ふでは無い。夫故。論語。君と親。小能く。事へ。朋友。交つて。信。有る。あらば。未。學。ハ。交。又。曰。とい。牙。ぞ。も。吾。ハ。必。お。れ。を。學。び。と。ゆ。と。謂。む。と。有。る。是。を。以。て。書。物。字。よ。む。む。の。で。が。學。問。と。云。で。无。く。其。行。ひ。を。識。者。小。問。て。正。しく。と。る。れ。の。學。問。あ。る。訣。を。知。る。が。宜。い。で。し。此。も。論。語。有。道。而。正。焉。可。謂。好。學。也。已。と。云。て。有。る。は。て。其。行。ひ。の。本。は。返。に。ぐ。も。今。在。る。親。を。大。切。小。と。る。と。固。よ。ゆ。先。祖。此。祭。祀。を。懇。小。と。る。は。本。で。し。然。る。る。世。此。人。此。先。祖。を。祭。る。状。を。お。ら。く。見。渡。に。處。が。ま。お。道。此。本。を。心。得。又。又。儒。者。お。ど。此。説。小。人。此。靈。魂。と。云。を。無。い。も。お。と。云。

て。死して風火此如く。散失て。知る事を無いあど、云ひ弘
免て。其説が世小普く。自然と世此人の心ヲ染於き。靈魂此
有無を辨へ。爰をるこや故ふ。いぢぞやも申こは如く。靈前
ヲ物ヲ捧ぐ。依よめ。甚粗畧ヲして。まぢ巳くは酒を於此上
小。堅魚ぶしあど。旨記物此限カフ。菜此物を調へて。夫ぞ
も鹽味の悪い。之ても。家内の者。料理方此者ヲ叱シ。於けこ
ゆ。何ナニウきる。先祖此靈前ソナ。供へ奉る物をば。此を靈前へ
上る此コノ。よ依て。構カマ。ぬあど云て。見こは狀カサ。さ牙宜キ。られむ。
鹽シホが辛カラ。からうと甘アツ。うらうや。煮ニユ。やうがふえまい。夫も構
は。爰コノ。や。ぢ。あし。ふ。な。は。い。だ。を。唱ナ。へ。加。杯カヒ。を。鳴ナ。して。供ソナ。へ。ご

み爲れむよい。と心得て居る。是コレ。が。抑ヨク。以ヨリ。此コノ。外ソノ。ある心得違
ひで。人此靈魂のきつと有ア。は。事コト。を。知チ。ら。ぬ。が。故ユ。で。人ヒト。此コノ。人
こる道の本を執トク。へ。終ハシ。む。是コレ。皆ミナ。儒者や僧徒ソウテ。の。世ヨ。生ナ。ぶ。あ
やくアツク。あ。事コト。ヲ。言イハ。ひ。弘ヒロ。を。る。う。ら。夫ウレ。み。か。ぶ。れ。て。か。や。う。よ。成ナ。來キ。
つツ。と。事コト。で。し。靈前ソナ。ヲ。供ソナ。へ。と。物モノ。を。其ソノ。終ハシ。あ。は。う。ら。ち。う。ぞ。ん。ざ
い。よ。思オモ。ふ。め。さ。る。事コト。を。あ。ぐ。ら。死シ。して。靈魂と成てハ。既スデ。小。神カミ。ご
み。依ヨ。て。爰コノ。が。彼カノ。焔エン。と。幽ユ。を。此コノ。境カマ。である。う。ら。も。は。や。生ナ。は。物モノ。を。
ムム。リ。ヤ。ク。バ。リ。ク。ト。云。や。う。み。は。喰ク。ハ。ぬ。訣ワカ。で。只タダ。其ソノ。氣味
む。か。ア。ま。う。少オウ。ク。吸ス。て。置オキ。は。、故ユ。る。其ソノ。儘タラシ。有ア。此コノ。で。し。め。し。疑ウタガ。は。く
思オモ。ハ。れる。人ヒト。も。其ソノ。供ソナ。ヲ。た。ろ。し。や。徒タラシ。み。あ。ま。つ。て。置オキ。と。此コノ。と。味アジ。

ひ比べて見れむ。灰うおわの味あつ。此は能く物此風味を食ひ分る人も直に知れませう。是お付て思ひ合ひべき咄しぐ有味。其は大峯や三峯あど云山。其山神此使者と云事で。狼があんと居る處が。其を他郷の者が。火防おとて。其山守も願つて。見立て一匹借る。但しかば味や云ふ約束はるばる。此事で。此方へ移きて來るでも無いが。其借ると云日よめ。江戸なら江戸お居お。日くる其狼お食お供へる處が。若急つて數日供おぬ事でも有ると。其借るせて。見立て定を置とる犬が。瘦いらが。つて弱味や云こと。此も拙者此知と人おども。借多事が有て。五七日食を供へ

る事を急とこれむ。先うらあめ此來と事が有て大蛇お魂消て居るあつとぞ。然らば其此方で供る食物ハ。減もはるゝと思ふ。夫も其儘あるが。コリヤやぞうで有ませう。何と幽事や云物ハ。測られぬも此では有はせん。神や先祖お物を供へて。其儘有きとめ。氣味のみを吸て。受ら味と云ふ事。此等字以多準へ知なき事と。何お斯ても粗畧よあたまはる。拙者あどハ怖ろしくて。粗畧もどうめ為らぬ。かやう此引言を云ふまでも無く。是迄段々申を如く。靈魂を有お相違なく。有違ひ無けきは。各々家々此。其祠堂お在るは必定此事もあ。慎んで粗畧おを爲ぬが宜いて

ム。かやう聞ても猶悟らば。たろそのうける人は。身も子め
思ハぬ。道知らば。此大不孝人と云。き者で。其行末が見ら
ば。やうで。一躰世の人。先祖祭を。粗畧おせるやうよ
成る。其起すは。右申に如く。腐儒者流。此生は。うあらと。僧
徒等。佛并阿弥陀おと云。山ぐに。を賣ん。を。勸を。込む。う
ら來と事。夫を。い。の。小。と云。云。○鏡胤云。此處。腐儒
者流。此僻説を。擧て。委く。論辨せられ。る。き。其。儘記し。置。ま
な。し。れ。ど。其。は。既。ふ。西籍。慨論。及び。其餘。も。委く。論。ひ。お
の。き。と。故。鈴屋。大人。此。御説。よ。め。大概。見。え。ある。事。な。れば。
無益。は。失費。を。思。ひ。て。お。は。省。た。ぬ。叔。又。爰。よ。引。繼。ぎ。て。僧

徒等。佛壇を飾れる状。夫。付。都て。此。所。爲。は。虚偽。よ。して。
唯。愚俗。の。者。な。して。強て。信。せ。令。む。と。欲。せる。奸計。ある。事。れ
ど。委く。論。ひ。置。れ。と。き。ども。其。を。出。定。笑。語。に。附。録。お。出。て。早
く。板。本。と。爲。て。世。お。弘。を。置。と。れば。今。と。爰。了。出。さ。む。ハ。櫻
木。は。災。也。も。云。べ。く。れ。む。と。き。又。略。き。ぬ。其。説。を。知。ら。ん。と。思
は。む。者。ハ。其。笑。語。よ。就。て。見。べ。し。附録一の卷三十一
よめ。未。見。る。べ。し。

○皇。囚。お。於。て。古。く。神。祇。を。御。祭。有。ら。せ。ら。れ。と。る。御。模。様。を
考。ふ。る。了。先。延。喜。式。お。御。載。お。け。き。と。る。諸。此。祝。詞。お。見。て。も。
大概。を。知。れ。ま。さ。ぐ。海。川。山。了。れ。と。出。嫁。物。盡。く。供。了。て。ほ。と
脛。上。高。知。脛。腹。滿。並。べ。お。と。申。て。あ。く。さ。む。お。御。酒。を。備。へ。神

此御心ヲ叶ひさうぬ。美ハ志き物旨た物を。心此至る限也。
忌淨免て奉也。けても猶此方不は。其如く念を盡しと扱も
アでめ。神此御心ヲ叶もぬ事や。漏落とる事の有て。御受め
あさ味まいの。御怒也も有ううと心を付て。漏落む事をば。
見直し聞直し坐て。受給ふやう不也。厚く心を盡して。其見
せかけ不。土や藁で作つと菓子よ。彩色をして。うろろ向不
供へると云邪うあ。虚飾輕薄あ事ハ。決して无き事でし。ご
不依て。古此眞の道を心挂る人は。先祖不物を奉る不も。此
心む牙よ心を盡して。先よく火を清免。清淨ふして。自分で
能く塩味をして。已の口ヲ食ても。至極うほいと云。処は猶

旨丸も志て。奉るやう不。心挂修き事でし。僧徒等此にる不
習つて。たや先祖の御聖あちを。蔑如不にる事ハ。決して有
はじき事。速に改む修きあとしてし。但し今世は。神道者ま

此説なき、習ひとる輩ハ。やかく世は逆らひ。謂ゆる佛坦
牙。強て魚鳥を供へ。汝と云やうか事よ。自慢不をるが。夫ハ
宜く无い。勿論父母よ。限らぬ。誰よもあれ。其存生れうち不
好まれとる物も。今以てはと免て供へるやう致しまし。
又折ふしハ。自ら口不食て。旨此有かどを。何れ此を奉ら
むやと思ふ時。も供へ進らせらる事。但し大色ハ拙者の
心得を。御咄し申に。此でし。尤も子共らよは。我が心。あつと
後不も。魚類精進もの。何れ依らぬ。旨き物を。多くんとく。此
れも言ひなく。けて先祖此靈前をば。日々不自ら拂ひ清免

て。神の枝と水やを備へる事也。我が古よ。め仕來つとる事
で。又志きみは。古くは花げう苑と云と物で。其も万葉集あ

どの香木とめ書て。此も其香を好しと志て。捧げと物うと
 思て候、由も有れば。此を備へるも宜う候べし。元來佛道
 小教牙られある事てい。有はせぬら。殊小氣を付て。毎朝
 新しき水を供牙。榮樹此水も替て。上流き事。まご草花を上
 候ふと。此も古小慥ある例は見當てませぬが。美し兒物で
 有あて。且神代此昔よゆ。伊邪那美大神此御靈を祭て奉
 る小。木囀人も。花阿る時うは。花を以て祭と有るは。由あ
 る事あれば。其時く此珍らしき花を折て。見せ奉候も能き
 事と思ふて。扱まご香を焼くこと。此も古よ例あき事あ
 臭を除んが爲小。好き薫りのぬた物あど用ふる。難ある
 まじ。世間う定香と云て。いけもせぬ。抹香を。昼夜く候が。

正か牙る程ういぶし立るあどい。扱まご親あど此忌日小
 決して爲まじき事と思て候る。扱まご親あど此忌日小
 は墓参て。おれもぞうぞ。心挂て致しぬい物て。尤も其御
 靈を家小留をて。日く仕牙奉るから。墓参てハは、よと思
 ふやうあれどめ。けうて无い。此も吾師本居翁此説小。神の
 御靈を。あ、加しこ小祭て。各く驗ある事を。一箇は火家。
 此彼小移し燈を。本此火め。滅ること无く減る事なく。其
 俛有て。其移し取ある火も。各く其光、此熾ある小。譬へられ
 はしとが。此は寔小は候事て。人も死ては。やがて神ごう依
 て。其如く幾あも御靈が分り。墓所小居るを元よて。其子
 ぞめ十人有て。各く其家小祭れむ。祭るとて。靈魂ハ幾あ

ふも分るふとて有まほりら。墓参^{ハカマツ}といきつと爲^セ祿むからぬ事。けて其親^ハ靈魂の居ら^ハ、墓^{ハカ}を守らせ置^オく寺院の事。ごふ依て。其寺院へは附^{ツケ}届^トけも。粗畧^{ソコ}ふ志ては。もほぬ。必身分相應^ニふ爲^スべき事^デ。只^タ僧徒等^ニ欺^ダされて。攻^セ取^リられ。と云^モ。魯鈍^{ロド}ふ人^ハ。けまるふと。此方^コそけのろま^グ嫌^ハいど。や云^フふれで^シ。抑^ヨ僧徒^ニら^ハ。此所^コ行^キを見る^ルふ。大抵^オハ神園^ニの神と思^ハ。依^レ事^ニある^ハ。お付^ケて^モ。篤胤^{トク}早くよ^シ。諸^シ園^ニ寺院^ハは有^リ。状^ヲを尋^ヒ。祿^ニ聞^ク。と依^ル。格^ニ別^ニけ異^ニ同^ニも。无^ク。大抵^オ五十^ニ歩^ニ。百^ニ歩^ニと云^フべき中^ニ。薩^ツ摩^ノ。園^ノ辺^ニ。事^ヲ多^ク聞^クふ。ま^カ於^テ寺院^ノの在^ル所^ニ。市中^ニ。おは^ニ。一个^ノ所^ニも。无^ク。何^レれめ常^ニの人家^ヲを放^ルれ。片^ハ鄙^ニ山^ノ附^ニ。おどよて。山^ノ号^ヲを称^スる^ルも。自然^ニ相應^スて。風景^ニも宜^ク。宋^ノ家^ヲをし。て。貴^クげ^ル。見^ル由^リ。さ^テ寺^ニ。定^メ法^ヲ。趣^ヲ聞^クふ。何^レれも。且^ニ家^ノ相應^ニの仕^ヲ法^ヲ有^リ。葬^ノ式^ヲ回^リ向^キ等^ニ。お入^リ用^ス。悉^ク。其^ノ寺院^ノよめ。出^ル。事^ヲよて。且^ニ家^ノを何^レ程^ニと定^メ。免^ル。贈^ル。ふ。多^ク。云^フ。事^ハ。

決して无^シ。只^シ。平^ノ士^ノ位^ニ。おて^ハ。青^ノ銅^ノ。二^十。四^十。匹^ヲ。三^十。匹^ヲ。を定^メ。免^ル。とし。い^ウ。ある^ハ。門^ノ。閤^ノ。大^ノ。身^ノ。よて^モ。金^ノ。五^十。匹^ヲ。百^匹。おら^で。も。贈^ラれ^ら。ざる^由。さ^テ。其^ノ。入^リ。用^ス。失^フ。費^ヲ。悉^ク。寺^ノ。院^ノ。よ^り。出^ル。事^ヲ。と定^メ。まり^居。て。夫^ノ。程^ノ。の。寺^ノ。祿^ヲ。も。常^ニ。領^ス。主^ノ。よ^シ。附^ク。置^ク。る^ハ。事^ハ。お。に^や。ぞ。右^ノ。故^ニ。葬^ノ。送^ル。は。多^ク。き^キ。好^ム。ま^カ。中^ニ。く^以。て。出^ル。定^メ。笑^ハ。語^ヲ。附^ク。録^ス。一^ノ。卷^ヲ。お。云^フ。へ^ル。如^シ。死^ノ。事^ハ。絶^テ。无^ク。夫^ノ。由^リ。を。病^ノ。氣^ヲ。平^ノ。瘡^ノ。の。祈^ル。禱^ス。を。も。厚^ク。勤^ム。む^ル。事^ハ。お。よ^シ。いと。愛^ス。と。く。仁^ノ。政^ヲ。と。も。云^フ。は。く^や。扱^キ。あ^き。跡^ヲ。け^レ。忌^日。祥^月。年。

忌^ヲを。申^ス。ふ^事は。世^ノ。人^ノ。こ^レ。れ。も。佛^ノ。道^ノ。よ^シ。教^ヲ。へ^ら。き^こる^ハ。如^ク。思^フ。つて^居。る^ハ。諸^ノ。此^ノ。經^ノ。論^ヲ。お。曾^カ。て^ナ。无^キ。事^ヲ。で^シ。其^ハ。七^十。八^代。六^條。天^ノ。皇^ノ。は。嘉^ノ。應^ノ。二^年。の。事^ヲ。で。有^マ。ま^ほ。り^ぐ。櫻^ノ。町^ノ。中^ノ。納^言。成^範。卿^ト。と云^フ。人^ノ。其^ノ。父^ノ。信^西。は。十^三。年^ノ。お。相^當。志^ス。と^る。故^ヲ。其^ノ。頃^ニ。天^ノ。下^ノ。の。知^識。と。聞^ク。え^こる^ハ。高^野。山^ノ。は。明^遍。僧^正。を。云^フ。お。け^レ。成^範。卿^ハ。弟^ト。で。有^リ。と。依^ル。故^ヲ。お。父^ノ。信^西。の。十^三。年^ノ。忌^ヲ。は。供^養。の。趣^ヲ。明^遍。お。

問れと処が。其返答よ。一切の經文を考ふる。凡人此遠忌
を弔ふ事。證と爲べき。いと曾てあく。佛法此功德と。いと
牙ば。五逆十惡の罪人。あてやめ。引導此功力を以て。成佛さ
せむと云。釋迦此本意。佛經は趣ごうら。五年も七年め。六
道此ちほごよ。流轉して。佛果を得る事。のあらぬと。其佛意
小背いて居る事。ご小依て。佛法を以て。父此遠忌を弔らふ
事は。堅く御無用多る。ぼく。忘らしを。づら。儒道小ハ。神主此
法とて。遠忌を祭事。が有る。其趣意と。去る者は。日く小遠
く。此を慕ふ心の。年く。疎くあるを以て。遠祭といふ。事
なれむ。儒法を以て。弔ひ給ふ。いと。然る。ぼく。を。答。ふ。と。と。

云と見え。まご東見記と云。物よ。京都相国寺。此瑞溪和尚
や云。一切經を考ふ。とる。処。年忌服忌。此事。曾て。あ。い。小
依て。儒道。此祭法。を。假て。年忌を。始免。と。と。有る。此の。如く
昔此正直ある。出家は。俗家。うら。遠忌を。弔ふ。事を。頼む。佛
經。小。无い。事。ご。と。云て。白地。小。儒道。を。借て。祭れ。と。申し。と。も
れ。を。今。の。僧徒。も。過去。帳を。繰出。して。且。家。此。遠忌。を。改免。今
年。何。月。何。日は。何。信。士。何。信。女。此。幾年。小。當る。所。や。云て。先
から。催促。する。や。う。小。成。さ。が。笑。しい。で。ん。案。の。処。も。大。に。小
御。世。話。オ。チ。ヤ。デ。モ。ア。ガ。レ。と。云て。宜。い。れ。で。ん。元。來。は。右。此
訣。由。也。年。忌。を。弔。ふ。事。外。ご。ハ。僧。徒。此。世。話。を。受。む。と。め。だ。い

じ無いも此。然まば御因レ此古風ハ祭テ。魚味ヲ供フ牙ヲやうと
め。儒道で祭らうとも思ひハく巴ハの好クハ爲シても。構ヒ無
き事デ。公の御觸ル。必ズ僧徒を頼ンで爲スよ。と云事ハやんと
無しデ。出ル。案ヲ云フ。僧徒ハ此方デ。年忌を弔ハうあど、申
小引導を渡して置テ。伊ヤ其許も々シ。加ラぬ事ハ云フ。先
浄土と云ふ善ク處ヘ導リて。此世ニまマご執ルせテ。何レ爲ス。極メ
執ルもレ。何レ故ニ。是マ。無イ。夫ハ今ニ又ニ年忌を弔ハはんあど
事ハ。夫レも出家の役ガ。せハむク。あど、きキ。然ルるハ今
は僧徒等も。其宗旨ハ祖師の遠忌を弔フ事ハ。佛道ニは無
い事デ。右ハ儒法を竊スんで爲スる事デ。然レむ引導を渡セ
扱テ今ハ世ハ。忌日ハ祥月と云ふ事ガ有テ。先ニそれ忌日と云は

親先祖あど此ハ。なレ。當日を。月毎ニ云フ。はハ祥月と
云ふは。其ハ。なりある月を。年毎ニ云フ。事デ。其ハ。祥月ハ。祥字を。
今は示スへんハ。羊と云フ。字ヲ書キ。東鑑ニ。あどハ依
て見れむ。昔ハ正月ハ。正字を書キ。もレ。此ハ。其ハ。正ニ。當リ
アル。月ト云ふハ。心デ。尤モ。あリ。かキ。方デ。又ハ。忌月トも申ス
あもレ。此ハ。其ハ。正ニ。當リ。は月故ハ。其ハ。月ハ。中ニ。万ヲを
忌慎ン。事ハ。あリ。忌月トは云フ。又ハ。其ハ。正ニ。當リ。は
月ハ。はハ。さシ。く當リある日ヲ。正日と云フ。其ハ。日は別シて忌
慎ミ。事ハ。あリ。忌日トめ云フ。もレ。古ハの正月ハ。忌日ハ。決メ
た。此ハの如クでシ。然ルるハ。何レ。頃ノ。ヤウツキヲ云フ。

正字を書く事^ヲ止^マ免^テ。祥字^ヲ替^ハつた^ルやうしぬ事^ト云^フ。
おまが今かく祥字^ハ。諸越^ルお於^テ。一周忌を小祥と云^ハ。服^ハ
此終^ハある。三年目の忌日を。大祥と云^ハ。ある。其祥字^ヲを借^リて
書^ク物^デ。其^レ正字^ヲを書^テは。月竝^ニ此正月と。字^ガ同^クて紛^ハ
らはちき故^ガ。祀替^ハともおと見えるでし。然れども古^ハ。右
申^モ如^ク。今云^フ。祥月^ハ此當日^ヲを。忌日と致^シて。月毎^ノ忌日
と云^ハ。や^ハ。御因^ハおも諸越^ルも無^クつ^ト物^デ。此^レお^ハ於^テ此頃
よ^シ致^シ來^ツ事^ヲ。いま^ゴ考^テ得^マせぬ^ガ。ふし古^ハ。无^ク
祀事^ハおめいぬ^セ。先祖^ノ祭祀^ヲを。厚^クに^スる事^ハある。此^レ宜^シい
事^デ。此^レを儒者^ハおどは。諸越^ル无^キふと故^ハ。有^ルまじ^キ祀

業^ヲとして。其^レ説^ハ。親^モ先祖^ヲを月毎^ニおは死^ハぬ^ル。其^レ死^ハぬ^ル。
唯^ニ一日^ニあら^ズは無^イ。など、云^ハ。いま^モも^ト。一^トお^ハは。尤^ニら
ち^ク聞^クる^ガ。ち^ウ云^ハ。お^ハら^ズ。年毎^ニおめ^テ死^ハぬ^ル。年^ニ
と^ハ此^レ忌日^ヲを祭^ハ事^ハも。有^ルま^じ祀^ハと、云^ハ。て宜^シから^ウ。既^ニ
お^ハ年毎^ニの忌日^ヲを祭^ル上^ニも。月毎^ニお。忌日^ヲを云^テ祭^レむと^テ。
何^レお悪^キ事^ガ有^ルま^せ。此^レは古^ヘよ^シも勝^ツて。懇^ニ到^ルある
所^ノ業^ハお依^テ。今^ノ世^ノの習^ハし^ム従^ツて。き^ツと爲^ルが宜^シい
で^シ。扱^ク此^レ一周忌。三年忌。七年忌。十三年忌。廿三年忌。三十
三年忌。五十年忌。百年忌。と云^テ。殊^ニ糸^ハん^ハぶ^ルお祭^レ。今^モ
寺^ノま^デも。遠^ニ忌^ト。二百年忌。五百年忌。千年忌。お^ハま^デ。

遙ハシ小數カクへて。嚴イカ免シクしく行イふ事と成ナましとぐ。先サキ予カ申マせ如カく。
古コは曾ソコてあは事コトで。皇ミコ罔カふ於カては。昔ムカシも一周忌イシツキをむてと云イて殊ト小祭コサマヒ也。諸越シヨでは。右ミダリ申マひ如カく。一周忌イシツキ字ジ小祥コサマヒと云イひ。服フク此終コノハシある三年サンネン免マを。大祥ダイサマヒと云イふは有アリまにぐ。佛道ブツダウもは。此年忌コノトシツキを弔トウふと云イ事は。曾ソコてあき事コトでし。然シカれどもあは事コトめ。月毎ツキノト忌日ツキノツキを祭マツルると同じ類タガひ小。懇切コンキツある事コトもあ。古コへ小无ムカつとる業イサごと云イて。捨スツばき事コトでい无ムいでし。何ナニにばも。古コよ異コトあはをば。一向ヒトスラふもふは捨スツむともは。宜ヨクしからぬは。のあら事コトでし。害ガイも爲ナる事コトも无ムくは。時世トキヨの習ナラひ小背ソムくぬが宜ヨクしい。殊ト小厚アツた方カタも従ヒカふとも云イべき事コトあれむ。猶ナホ更タラ

云イまでも无ムいでし。又多タラた事コト中ナカふも。古コよゆめ。今イマ此所ココ爲ナは勝マツりとる事コトめ有アリでし。其ソノはまは。中園ナカノ相罔サウカウ公賢コウケン公の園ノ大曆ダイリキと申マひ記録キコク小。貞和三年テイワサンネン九月クニツキ廿五日ニニツヒ今日こんにち竹林院シノキノ入道ニョウダウ左大臣サダメノ世ヨ三回サンクワ忌辰ツキツチ也。因ユ茲ココ廣義門院コウギカドノ就ツキ于西園寺サイエンジ無量光院ムリヤウカウノ壇場ダンバウ被修セウ御佛事ミブツコト。期月キツキ佛事ブツコト。先規サキキ未詳ミサイヤウ。且取ツキ于教内キョウノウ。更無ミナ所見コトミ。然シカ而シテ或ハ又有タラ營イサ此事コト人ヒト欤カ。予カ先妣サキハハ此忌辰ツキツチ有アリ相營サウイサ事コト。所詮ソコ幽靈ユウレイ之追福ツキフク。遠近トウキン盡ス懇志コンシ之條ノ。可叶カキ孝子之道コウシノチノ欤カ。と有アリまにぐ。此論コノロンも此ココは。穩オトうで宜ヨクい。のら。きつと年忌トシツキを弔トウふば。此事コトは。佛經ブツキョウを誦ソムし。佛事ブツコトを修シユはる事コトも。我ワレは嫌キヤウひでも。先代サキノの方カタくは。好コトまにとる事コトで。何ナニは。ら。其意ソノイ小背ソムく。とめかくも。舊コト

ちぶて此終ふ爲る此が。此公賢公の言をし如く。遠近懇志
字盡にの理にて。孝心は道ふ叶ふわけでし。古ふ无つと事
を申せれば。學問は上よ於て。本を知れき爲ふ申にふやで。
少し訣が違ふ。扱今れ心得を斯の如くぞし。右申せ如く。七
十八代。六條。天皇の御世あこよゆ。猶あむらく年忌を弔
ふふは。御罔風は祭法了。儒法を交りて祭せしは。後ふ百
四五十年も過て。ふれ貞和三年は前何ぬりよ。そろく
佛經を讀ませも。弔ふ事が始ま。此後まはくさやうふ
爲は。今の如く押並て。佛事を修まは事とは成さもれで
し。ふの貞和三年頃より。今ふれ文化は未頃
までふも。凡そ五百年足らぬ成ぬべし。

○毎年七月十四日。十五日。此兩日。精靈祭と云ひて。先祖
代々及び。眷族は御靈を祭。又生御靈を云て。現在此父母
をも祝祭る。此も何よと云事ハ知られど。好き事を思て
は。あ。但し古くは。二月四月十一月。其祭あはる事ハ。
既第五卷産土神。此下。官符の御文を引て云るが如し。
然るを。七月祭る事。成は。は。い。の。ふ。と。云。此も彼。佛法
は。弘。ま。は。ふ。從。ひ。て。盂。蘭。盆。は。説。あ。と。行。ハ。き。佛。信。心。は。者。と
も。年。ふ。三。度。の。古。風。を。捨。て。七。月。に。祭。れ。る。よ。也。今。は。如。く。は
成。れ。る。あ。は。べ。じ。世間靈祭は有様を見は。佛道の仕法は
混。て。此。所。爲。あ。る。事。明。ら。け。く。見。ゆ。○盂。蘭。盆。の。事。ハ。い。と
古。く。聞。え。て。古。書。等。も。出。さ。れ。ど。信。じ。べ。ら。ら。ば。扱。今。七。月

比十四五日を盆と云ふ。孟蘭盆の略稱にて。本よと公此御
定、非び俗稱あるべし。いづて此も廢と云き物にそあ
右等の事別論する物あり。扱う此に靈焼、年六度往來に
れど、此も委くハ云ふ也。扱う此に靈焼、年六度往來に
と云ふ。佛經此説も有るに依て、度々祭也。中よも七月を重
くし。十二月を終りと云て、厚くせる由ありと云。此六度往
來と云ふ也。妄説あり。若くは古風三度此靈祭よ也。か、依
附會を云出さるは非ざらぬ。扱まて七月此靈祭りの事、
弘く世間此様子を見ゆ。大抵佛道に依て爲る事もあ
例の虚飾輕薄は仕法はみ多く、却りて靈前より對し、無礼き
事よも思はるべきば、予が家おても、然る事ハ敏く止めて、粗
略あぐらめ、寔情よ叶ふ事此みを以て、祭るよと、せ也。就

ては、七月を惡くとほるは非ざれども、同くも古例此如
く。二月四月十一月。三度此靈祭お復しと云思ふあり。若も
三度おては、事多しあや、思もむ人は、せめて春秋二季お
ても、行ハま欲き事おこそ。扱まて古く。二月四月十一月此
靈祭は、今世も絶とるうと思ひし。近頃聞々ば、薩摩、因お
ても、十一月おは、必氏神祭やて、家より祭る習ひ也とぞ。但
二月四月も祭る。其仕法を聞く。大抵其家お依りて、日限
事も無しとぞ。但し親族中みあ同日おは、非也。此も互ひて往來
定也あり。集會する爲あり。又日限を定むる家も有とぞ。
親類の中互ひお招か招れつ。懇ろ賑く、あく祝ひ祭る事を
とぞ。此もいやく、愛と云古風よて、何方おても、斯く有

多く所思也。彼、固を始也。天孫降臨、此御本圖也。自から人心淳く。古風、此遺れる也。○鑿胤云、二月四月十一日、先祖靈祭、此事は、寛平七年、官符を以て、嚴然と仰せ渡さきある程の事也。必古く確乎とる證例ある事也。依て按ふ、若くは神代三柱の天皇命、此御忌月、あど、非ざらう。此、何れも、いや上代よ、その習風、あるこや、論ひあし。少うも思ひ合を、なき事も無く、いとく、畏々れど、唯試み申はのみ也。

○或人、門人土屋清道、問て曰く、我ハ誠、不肖、此性質、あれども、追く先生、此御講説を承て、尊内卑外、此大義を辨

牙。敬神、此道をも粗拜承い、あし候、辱き仕合也。然る、此我ガ家代、佛宗、此佛壇を構、本尊と云、佛像も有り。却て先祖代、此靈代、佛弟子、此如く、よして、戒名と云を付け。下段、此差置く事、此幾代、先よ、此様い、あし來れる也。更に分ら、早く改正、此致し、とく候、と、家内、よて、承引せ、ざ、依者も有、此は、と世間、躰め如何、あぞ申、何分、改を、此、甚迷惑、此る事、あり、何とい、あし、然る可くや。御教導、下され、と、しと云ふ。清道、答て云く。夫は、一應、御尤、此やう、あれども。御決断、此宜し、から、ざ、依也。熟と御考へ、あける、考し。先、其御家、此藤原姓、ある由、然れ、此神代、以來、此御系統、此也。

はて佛法を人皇よと御三十代欽明天皇に御せり。初て外圀よと渡り追く上ふも御信仰に依て世間をめぐらまは。諸人大抵信用する事と成るは凡五六百年以後此事と思はれ、あて然れど其頃よと佛像を差置れ候とも御代數凡二十代程あるべし然るも大御先祖天兒屋根命よと御系統御相續も申に迄も无之佛道弘通以前此間凡そ二千餘年あり御世數は五十代も歴給ひしあるべし其間佛道あり時なきば神祭ありし事論ひあは然れど後此代此習弊を捨て大祖以來五十代此正風も復し給む事は至當の道理と思われ候去あがら物を依て古風を好む計

も申し回く然るは後世次くお開け行て宜き事も多かる事なきば此處め能く考ふべし然るも我ら不學あからぬ佛書此眞面目を読み殊も先生此講説を承候て佛法此人道小叶むざる事は熟と心得候へむ此善惡ハ論を俟て旁旁以て速よ之を改免給む事何も憚るべき事と非べと答々れば或人謝して云く御教諭此趣一々辱く領承致し候早く改免可申候斯く心付候て速く改免交んむ却て祖先此咎米を受候むむも計と回しと悦むて歸れりとぞ○或人石井篤任お問て曰く拙生同志此者ども次々相増候處各々家々此靈屋も弥陀觀音等も佛像を本尊と号し

或も彼親鸞日蓮らぐ画像も有也。右はいかよりの安置い
ごし有之候。然る処近來古道相學び、神此御因に尊た事を
辨了候ても、右佛像此類、早く取除申之由、何れも申出候。
尤然るべき事とも存じ候へども、今一時小取除候ても、自
然公の御掟に相觸候や小め思ひき、且數百年も祭に來り
候事あれども、若も祟を爲せ事を候もんり、貴殿も早くよ
す。幽界に神仙よめ仕了給へ由、右等ハ如何取計ひて宜
しかるべくや。何とぞ祟あど申し事、一切无之。まご公此御
掟も違はざるやうに取扱方。御教示偏に希ひぬく存じ
候。篤任對て曰く。皇因に神因に候へむ。佛法に渡らざる以

前も申に小及ばず。渡來此後とても、多くも神祇此み尊崇
いごし來り候事。今更申に迄め无之候へども、右渡來此後。
追く上の御信用有之。下にも次第に信仰此輩出來。時々は
不思議此靈驗等も有し小依て。質朴此人心相靡き。中古以
來大抵家々小祀り候やう相成來れる事と存じ候。尤も上
よす。必佛像を祀るべき旨に御沙汰も無く。まご神祇を尊
敬せはじり由に御達し等ハ。一切无之。各々心くる致し來
候事小候。但し寺院小宗旨に定有之儀も。御治世以來。加
此耶蘇宗嚴まご御制禁了付ても。其邪宗よは無之や。御糺
明は爲す。今の十宗を立置此候事と承り候。殊に佛法小拘

或も彼親鸞日蓮らぐ画像も有也。右はいかより安置い
とし有之候。然る処近來古道相學び、神此御因に尊た事を
辨了候ても、右佛像此類、早く取除申之由、何れも申出候。
尤然るべき事とも存じ候へども、今一時小取除候ても、自
然公の御掟に相觸候や小め思ひま、且數百年も祭に來り
候事あれども、若も祟を爲す事を候もんく、貴殿小を早くよ
す。幽界此神仙よめ仕了給へ由、右等ハ如何取計ひて宜
しかるべくや。何とぞ祟おと申に事、一切无之。まご公此御
掟も違はざるやう此取扱方、御教示偏小希ひぬく存じ
候。篤任對て曰く、皇因に神因に候へむ。佛法此渡らざる以

前を申に小及ばず。渡來此後とても、多くも神祇此み尊崇
いとし來に候事。今更申に迄め无之候へども、右渡來此後。
追く上の御信用有之。下にも次第の信仰此輩出來時、いは
不思議此靈驗等も有し小依て、質朴此人心相靡き。中古以
來大抵家小祀り候やう相成來れる事と存じ候。尤も上
よ也。必佛像を祀るは此旨此御沙汰も无く。まご神祇を尊
敬はばじ此由此御達し等ハ。一切无之。各く心く了致し來
候事小候。但し寺院小宗旨此定有之儀も、御治世以來、加
此耶蘇宗嚴志く御制禁了付ても、其邪宗よは無之や。御糺
明は爲了。今の十宗を立置此候事と承に候。殊小佛法小拘

はらび。世間。神代以來。祭祀。葬式も。嚴然と相傳。ても。は
多。儒道。渡來以後も。儒法の。祭祀。仕來。め。不少。候へば。各。心
心。不可。有。之。事と。存じ。候。左。候へば。本尊と云。佛像を。置くも
置かぬも。勝手。次第。ふて。彼。親鸞。日蓮。ら。が。像。れ。如。きた。云。迄
め。无。く。悉。く。取。除。候。ても。不。苦。事と。存じ。候。去。あ。が。ら。御。尋。ふ
付て。愚。按。い。る。し。候。佛と云。物。其。本。は。有。名。無。家。候。とも。
中古。以來。代。く。尊。信。ひ。こ。し。且。相。應。ふ。馳。走。をも。爲。來。り。候。家
家。於。て。は。自。然。と。靈。異。も。可。有。之。も。と。外。因。よ。り。居。候。よ
は。候。牙。ども。祀。られ。こ。る。上。よ。は。少。し。も。其。家。を。守。り。こ。る。事
も。有。げ。く。候。へ。ば。今。正。道。を。辨。知。り。こ。れ。バ。と。て。速。く。取。片

付候も。何と。や。不。仁。に。様。も。相。當。で。且。父。祖。也。其。通。り
み。致。し。置。れ。候。事。も。候。へ。ば。俄。に。追。放。は。先。見。合。せ。候。て。此
後。も。能。く。其。佛。像。に。對。し。相。諭。し。可。申。事。と。存。じ。候。摠。て。鬼。神
よ。横。道。无。し。と。て。能。く。正。理。を。申。聞。候。へ。む。屹。度。承。伏。せ。る。物
也。抑。我。が。因。も。元。來。神。因。多。る。事。お。れ。ば。神。祇。を。む。尊。敬。い。る
ま。げ。き。事。勿。論。よ。て。佛。像。お。ど。も。各。く。家。に。上。段。正。面。に。置
け。物。よ。非。ざ。ゆ。故。を。能。く。申。聞。せ。ま。ご。家。族。の。中。不。承。知。れ
者。へ。も。其。事。を。能。く。辨。了。させ。候。上。よ。て。漢。籍。よ。も。鬼。有。所。歸。
乃。不。爲。厲。とも。有。之。候。へ。ば。其。歸。り。寄。る。所。あ。く。て。は。不。宜。候
間。各。其。分。限。に。應。じ。其。佛。像。へ。金。錢。又。も。米。穀。お。も。相。添。へ。

寺へ送遣オクリツカせし可申候。左候牙ば、其所に安居して、決して祟クサミを爲ナすも、けふは無之候。必しも海川へ流ながし弄弄。又も焼弄ヤキ弄あどいとし候も、道あらぬ事。摠スベて性急激烈、此取扱トリアツキは、必いあるまほじ、此事と存候。右は容易クヤスく可申事、ハ无之候へども、折角御尋タツ此事も、あふ。只く拙者、此心得を御答、申候あす。能御勘考、可被成候。宍シのし去。

○鉄胤云、是よと下十枚計り、ハ、葬式了係まる事を記し置れあるが、今は不用と成れる、依て之を除けり、然候も、此事御一新後、も古風の葬祭も、願ひのまほし。官許を蒙る事とあり、將同學、此方くあて、其式の書等、略儀からめ、數部出來て、誰も心く、採と用ふ、げく成まらばあす。

大壘君御一代畧記

男鉄胤謹記

安永五
申 丙

我父大壘君ハ、安永五年丙申八月廿四日卯上、刻秋田久保田ノ城下ナル下谷地町ノ邸ニテ生レ玉ヘリ。幼名正吉ト稱シ玉フ。父君ハ、即佐竹家ノ藩士ニテ、大和田清兵衛平祚胤君ト申ス。御先祖ハ、畏ケレド、天照大御神ヨリ三十二世之御末、神武天皇ヨリハ、五十代ノ御門。

桓武天皇之皇子、葛原親王ヨリ廿八代、一本廿七代ト云、之

後胤、大和田伊賀守家胤君之代、佐竹義重朝臣、常陸

因額田へ出張ノ時、始メテ奉仕シ玉ヘリ。始メハ、飼馬料トシテ、二百石賜ハレルガ、後ニ額

テ、家臣ト成リ、世々奉仕セラレタルナリ。其御子重胤君、其御子政胤君、其御子朝

同六 酉丁	胤君其御子旨胤君其御子玄胤君其御子依胤君其御子保胤君其御子スナハチ祚胤君ニ坐ニセリ。 <small>依胤君ノ次男ニテ。保胤君ノ弟ナリ。</small> 葛原親王ヨリ三十五代ナリ。 <small>一云三十四代。其頃家祿百石ニテ大番士ノ伍長タリキ。系譜ノ委キテハ父千葉内文ト云書アリ。依テコノニ畧ス。</small> 母刀自ハ同藩士那珂儀右衛門交通主ノ息女ナリ。御子男女八人アリ。嫡男忠兵衛雅胤主。二男渡邊但見正胤主。三男正右衛門家胤主。四男ハ大壘君ナリ。五ハ女子ニテ政子ト云フ。六男手賀主水胤秀主。七ハ女子文子ト云。 <small>後ニ兄正胤ノ養女トナレリ。</small> 二人ハ早世ナリ。雅胤主廿九歳ニテ病死セラル。子无シ。二男ハ早ク他家相續セラレタル故ニ。三男家胤主家嗣トハ成ラレタリ。	貳歳
----------	---	----

同七 戌戊	同八 亥己	同九 子庚	天明元 丑辛	同二 寅壬	同三 卯癸	同四 辰甲	同五 巳乙	同六 午丙	同七 未丁	同八 申戊	寛政元 酉己
					儒家中山青菽先生ト云人ニ隨テ漢學ヲ始メ玉フ。					叔父柳元老ニ從テ醫術ヲ學ビ名ヲ玄琢ト稱シ玉フ。	
參歳	四歳	五歳	六歳	七歳	八歳	九歳	十歳	十一歳	十二歳	十三歳	十四歳

寛政二 戊庚	元服シテ家名胤行ト稱シ玉フ	十五歳
同三 亥辛		十六歳
同四 子壬		十七歳
同五 丑癸		十八歳
同六 寅甲		十九歳
同七 卯乙	是ニテ專ト漢學ヲ爲シ、夕某ク師家ニ就テ、武術數般ノ修行ヲモ爲シ玉ヘルガ、常ニ大キニ憤激シ玉フ、有ルニ依テ、俄ニ志ヲ起シ、今年正月八日、遺書シテ罔ヲ去リ。 <small>正月八日ニ家ヲ出タル者ハ再ビ歸ラズト云トゾ。</small> 資費ワツカニ金一兩ヲ持テ、江戸ニ出玉フ。故有テ藩ニ寄ラズ、朋友ヲモ恃マズ、唯正義博學ノ良師ヲ得ムトシテ、諸所遊學シテ、試ミ玉ヒ、或ハ學事ノ爲ニ使ハレ、或ハ餉口ノ爲ニ人ニ雇ハレ、又ハ假ニ主取ヲモシ	二十歳

同十二 申庚	今年八月由有リテ、備中罔松山ノ城主、板倉侯ノ藩士、平田藤兵衛平、篤穩君ノ嗣子ト成テ、以後板倉家ニ仕ヘ玉、代江戸定居ナリ。○篤穩君御先祖ハ畏クモ、桓武天皇之御後胤、平田四郎入道貞繼主 <small>後筑後守ト稱ス。</small> 之庶流ナリ、本罔ハ伊賀罔ナルガ、故有テ出雲、罔秋鹿郡ニ移リ。	廿五歳
同十一 未己		廿四歳
同十 午戊		廿三歳
同九 己丁		廿二歳
同八 辰丙	テ打過玉ヘル、凡四五年、其間ノ辛苦艱難、云ベキヤウ无カリキト、後ニ御自ラ語り玉ヘリ、外ニ記録ナキ故、ソノ御履歷委ク知ル、能ハズ。 <small>予ガ一代記ハ昔カラ記ベシト、常ニハ宣ヒシカド、其暇无クシテ、終ニ成シ玉、ハナリキト、惜シ。</small>	廿一歳

○玉ノ考キ附

○三

秋鹿氏ヲ頼ミテ同圀平田郷ヲ領シ代々住ミ玉ヘルガ後ニ
遠江圀ニ移リ玉ヘリ。御中祖平田源左衛門尉宗經君ト
申ハ。天正年中。遠江圀泉郷ニテ生レ玉ヘルガ。後ニ駿河圀ニ
下リ玉ヘリトゾ。委キ系圀モ有ツルヲ武田信玄達
江圀乱入ノ時焼失ノ由申シ傳ス家ノ紋所井桁
ノ中ニ澤瀉ナリ。宗經君ノ御子源左衛門尉宗勝君。其御
子吉右衛門宗次君。ソノ御子ヲ源左衛門宗重君ト申ス。此
ハ嫡子ナレド。故有テ浪人ニテ終ラレタリトゾ。其御二男ヲ。又
右衛門某君ト稱ス。此主ヨリ始メテ板倉家ニ奉仕シ玉ヘリ。
其ハ寛文九己酉年ニテ隱岐守重常朝臣ノ御代ナリキ。其
御子源兵衛篤敬君。其御子藤吾敬房君。其御子ハスナハ
チ藤兵衛篤穩君ナリ。初メ順助ト稱シ玉フ。家ハ遠江圀
横須賀ノ城主西尾侯ノ藩醫。天野道順景德主ノ嫡男

ナルガ敬房君御子无キニ依テ養子ト成玉ヘルナリ。元來醫
業ヲバ好ミ玉ハガル故ナリトゾ。斯テ我父君ニハ唯一人秋田
ヲ出玉ヘル故ニ。江府ニ親族ナレ。依テ上總圀久留里城主
黒田侯之藩士高久喜兵衛文吉主ヲ家元ニ頼ミ。叔父
分ト爲テ。養子ニハ成玉ヘリ。家ハ篤穩君ハ山鹿流ノ兵
學家ニテ。兼テ其門人ト成リ。教授ヲ受ケ。其道ヲ學ビ
玉ヒテ。懇意ナリシ故ナリトゾ。叔マタ高久文吉主ハ能ク
志合ヘル人ナル故ニ。叔父分ニモ頼ミ玉ヒ。バタ彼主モ。父君
ノ勉勵苦學ヲ。深ク感賞シテ。厚ク介抱ヲモ爲ラレタリト
ゾ。高久氏ハ本圀下野ニ
テ佐久山ノ産ナリキ牛込神樂坂ナル。本多修理殿ハ板倉侯ノ
智君ナルガカネテ篤穩君ソノ奥附ヲ命ゼラレ。去シ寛政六
甲寅年ヨリ。同所ニ移リ住玉ヘリ。父子ノ御契約モ。此処ニ

文化元 子甲	同三 亥癸	同二 戌壬	享和元 酉辛	テナリ。家祿ハ世々五十石ナルガ本多家ヨリ奥附中。別ニ月俸五人分ヲ充ラレタリ。 今年春初メテ。鈴屋大人ノ著書ヲ見テ。大キニ古學ノ志ヲ起シ。同七月松坂ニ名簿ヲ捧ゲ玉フ。○六月十六日。養母君ハナリ玉ヘリ。○八月十三日。乃自君嫁シ來玉ヘリ。御家家ハ駿河岡沼津城主。水野侯ノ藩士。石橋宇右衛門常房主ノ女ニテ。二十歳ニ成玉フ。御名ハ織瀬君ト申ス。御子三人アリ。 <small>下ニ出。</small>	廿六歳
		五月廿日。嫡男常太郎出生。○六月廿日。常太郎早世。			廿七歳
		今年太宰純ガ著書ヲ見テ。大ニ其不經ヲ憤リ。呵安書ト云フ著シ玉フ。コレ著述ノ始ナリ。			廿八歳
		今春ヨリ家号ヲ眞菅乃屋ト称シ。開業アリテ。門人追々			廿九歳

同六 巳己	同五 辰戊	同四 卯丁	同三 寅丙	同二 丑乙		
今年山下町へ移リ玉ヒテ。弘ク古道ノ講説ヲ始メ玉フ。次々	○傷寒雜病論解。及ビソノ考文章稿成。 ○七月神祇伯白川殿ヨリ。諸圖附屬ノ神職等へ。專古學教授セシムヘキ旨ヲ頼玉フ。依テ御同家ノ學則ヲ訂正シ玉フ。	今春尾張町へ移リ玉フ。○四月。日半兵衛神樂坂ニテ出生。以上男女子三人。産土神ハ。築土明神ニ坐マセリ。	再ビ塾師ト爲リ。名ヲ元瑞ト改メ玉フ。學業ノ爲ニ千枝子二人ヲ連レ。守山町ト云処へ轉居シ玉フ。○千嶋白浪草稿初。	○鬼神新論初稿成。○伊勢兩宮御鎮座部類記成。 ○本教外編稿成。	進ム。○德行式成ル。亦五徳説トモ云。 正月十六日。女千枝子出生。後ニ鍊胤之妻ト成レリ。	入門之者三人 三十歳 入門三人 三十一歳 入門四人 三十二歳 入門二人
					三十四歳	

○玉ふまき附

文化七 午庚	儒道佛道ガヨビ諸道ノ大意ヲモ講ジ玉フ。○伊勢物語 梓弓稿本成。○十一月六日、養父君ハナリ玉ヘリ。 ○志都乃石屋初稿成。	三十五歳 入門三人
同八 未辛	春ヨリ始メテ。○古道大意。○俗神道大意。○漢學大意。 ○佛道大意。○醫道大意。○歌道大意。○玉多須喜等ノ 講本次ク成レリ。今年大キニ憤發シ玉フ有ニ依テ十 二月初、密ニ駿河園ニ行テ、府中ナル、柴崎直古ガ家ノ 一間ニ籠リテ、古史成文ヲ撰ミ玉ヒテ、古史徵等ノ草稿 成レリ。委クハ是時ノ禱詞アリ。 <small>關題記ノ 未ニ附ス。</small> ○古史成文ヲ 初ニハ古史ト稱シ、古史徵ヲ初ニハ古史或問ト云ヘリ。 八月廿七日、母君ハナリ玉ヘリ。御年三十一。○靈能眞柱成。 ○古史傳ノ草稿ヲモ初メ玉ヘリ。	三十六歳 入門十人
同九 申壬	八月廿七日、母君ハナリ玉ヘリ。御年三十一。○靈能眞柱成。 ○古史傳ノ草稿ヲモ初メ玉ヘリ。	三十七歳 入門十人

同十 酉癸	正月○入學問答ヲ記シ玉フ。是年南鍋町へ移リ。又 北八町堀鍛冶町ト云処へ移リ玉フ。 ○三大考辨ク成。○機乃麻ク迹ク次ク成ル。 ○古史傳二帙成。	三十八歳 入門七人
同十一 戌甲	○天津祝詞考成。○古史傳三帙成。 今年大キニ著述ヲ急ギテ草稿數卷成レリ。	三十九歳 入門十人
同十二 亥乙	今春京橋三十間堀へ移リ玉フ。半兵衛ヲ又五郎ト 改名シ玉フ。四月始メテ、鹿島宮、香取宮、及ヒ 息栖神社ニ參詣玉フ。序ニ銚子辺ヲ廻リ。諸社巡 拜シテ、天之石笛ヲ得玉ヘリ。之ニ依テ家号ヲ、伊吹乃 屋ト改メ、通稱ヲ大角ト名告玉フ。扱マタ大壘ト申ス。 御称号ハ、早ク秋田ニテ、漢學ヲ爲玉ヘル頃ニ專ト稱シ	四十歳 入門十人
同十三 子丙	御称号ハ、早ク秋田ニテ、漢學ヲ爲玉ヘル頃ニ專ト稱シ	四十一歳

○玉多須喜附

文化十四 丑丁	<p>至ヘルガ其後ハ用ヒラレズ又文政ノ末方ヨリ再ビ用ヒ至ヘリ。斯テ花押ハ、カ此ノ如クニテ。卽也。字ナリ。<small>篤胤也ト云フナリ。然</small>レドモ、家ハ大慶ニ由アル字ナリ。其ハ別ニ記シ至ヘル物アリ。</p> <p>○九月廿四日又五郎病死。 ○古史系圖上帖刻成。</p> <p>○每朝神拜詞記刻成。</p>	入門十八
文政元 寅戊	<p>正月○天說辨々成ル。 ○天石笛之記成。</p> <p>○古史傳四帙稿本成。</p> <p>○古史成文。古史徵神代部刻成。</p> <p>○古史傳五帙稿成。 ○参考神名式草稿始。</p>	四十二歳 入門十八
同二 卯己	<p>正月二日。古道學神号ヲ書テ板ニ彫シメ至フ。此ヲ願フ者多キニ依テナリ。 三月十五日立テ再ビ 鹿島香取宮ニ詣至フ。五月歸府。 ○六月ヨリ始メテ古史徵ノ開題記</p>	四十四歳 入門十八

同三 辰庚	<p>ヲ著ハレ至フ。續キテ刻成ル。</p> <p>正月二日。○古道太元巖幽分属図説ヲ著シ至フ。直ニ刻成。</p> <p>三月三日。湯島天神男坂下へ移リ至フ。</p> <p>○西蕃太古傳初稿成。 ○印度藏志草稿ヲモ始メ至フ。</p> <p>五月○天満宮御傳記畧刻成。</p>	四十五歳 入門十八
同四 巳辛	<p>○神字日文傳及ビ疑字篇草稿成。 ○密法修事部類草稿成。 ○古今妖魅考草稿成。</p>	四十六歳 入門十八
同五 午壬	<p>七月十六日 上野宮ヨリ著述書類 御一覽有ラセラレタキ旨。茂野帶刀ヲ以テ 御内命アリ之ニ依テ古史成文。同徵開題記神代御系図。靈能眞柱等差上ラル。豊田少進披露ナリ。其後 御感不淺之旨御沙汰ニテ。八月十八日。白羽二重二匹。御上下地一具賜ハレリ。</p>	四十七歳 入門十八

○王多事附

○仙境異聞稿成一名仙童寅吉物語トモ云。
○勝五郎再生記聞成。

文政六
未 癸

今年六月カネテ學業ノ爲ニ願ヒ玉ヘル一有ニ依テ板倉家ヨリ永ノ暇賜ハリ玉ヘリ。七月廿二日發足ニテ上京シ玉フ御供ハ太田朝恭ト外ニ僕又平ト二人ナリ八月三日熱田宮ニ詣テ玉フ。同六日京都ニ上リ著玉フ藤井高尚主箕田水月翁江戸爲之藤田春相一タ六人部節香同ク息是香ナドニ出會玉フカクテ著述ノ御書トモ獻備奉ラムノ願ヒニテ上リ玉ヘル一ナレバ即製本ノ用意モ整ヒ豫テ富小路治部御殿ノ御内奏ニ依テ古史成文同徴開頭記神代御系圖靈能眞柱古史傳抄寫數卷取揃ヘ九月朔日ヲリレモ天恩日ノ吉日ナレバトテ

四十八歳

治部御殿ニテ差上ラレ同卿ヨリ先

仙洞御所ヘ傳ヘ献リ玉ヘルニ殊ニ

感サセ玉ヘル由一タ六人部節香父子ムネト計ラヒテ

禁裡御所ヘ御局冷泉殿ヨリ長橋局ト申ス御方ニテ

板本殘ラズ差上ラレソレ悉ク御披露アラセラレタルニ厚ク

感聞エサセ玉ヘル由即冷泉殿ヨリ御書ヲ賜ハリ金銀緑色ノ

御短冊二百枚下レ賜ヘリ富小路殿ヨリ其由御序文ニ記レ賜

ハレイトク有難ク學問ノ規模情レサ辱サ申スベキ詞无

ク教子等モ悦ビアヘリキ斯テ年來ノ本意ヲモ遂玉ヒ

ハ夕倍クニ著述ヲ急ギ玉ヘルニ依テ同ク廿日京ヲ立出テ

伏水ヨリ船ニテ下リ晚ガ夕浪花ニ著テ二三日逗リテ向門

ノ人々ニモ逢玉ヒ夫ヨリ若山ニ行テ藤垣内ヲ訊ヒカネテ

學ビノ爲トハ云ヒナガラ。嚮ニ甚ク論ヒ玉ヘル事ノ有リレニ
依テ其謝ガテラ歌ヲ詠テ。武藏野ニクキ落テ有レド今更
ニ寄來レ子ヲバアハレトモ見ヨ。ト書テ出シ玉ヒケレバ翁ノ
返レニ。人ノツラ齧ムハカリ物言ヒレ人。今日アヒ見レバ憎ク
レモ非ズ。ト外ニ九首アリ。合セテ十首詠テ出サレ。心ノソヒ
打トケテ。レバく酒酌カハレツ。語り玉ヘリ。爰ニ翁コト更ニ
鴨水井特ガ画キタル。故大人ノ御肖像ノ挂軸トサキニ故
大人ノ後世ノ御璽ニトテ。神路山ノ櫻木モテ。三ツ造ラレ
メ玉ヘル御笏ノ一ツ。又ソノ時ニ。同ジ墨筆ニテ。公翁ノ書レタ
ル御璽号ノ一ヒラ有ヲモ取出シテ。悉ニ授ケ與ヘラレタリ。父
君イトく辱クフカク感悅ビ玉ヘリ。然ルハ古キ教子等モ
多カルニ。其ハオキテ。唯三ナルヲ。其二ハ即藤垣内ト。鈴屋ノ

御許ニ齋キ玉ヒ。今一ツ殘レルヲ。出シ賜ハリタルハ。末世マデ
モ。殊ニ尊ニ齋キ奉ルベク。世ニ比類ナキ。大人ノ御璽代
ナレバナリ。 廿五日若山出立。大和へ廻リ。古ク尊キ
御社へハ。悉ク參拜シ玉ヒ。夫ヨリ伊勢へ出テ。十二月朔日
參 宮。レ玉ヒ。三日ニ山田へ參 宮。四日ニ山室山へ
參拜シ玉ヒ。夫ヨリ鈴屋ヲ訊玉ヒテ。春庭翁ニ見エ。故翁
ノ用ヒフルサレタル御筆ヲ乞受玉ヘリ。此ヲ以テ古史傳清書
ノ時。一行ナリトモ書玉
ニノ御 心ナリ。 夫ヨリ又東海道ヲ下リ。十二日ニ駿府へ立寄り。

十九日家ニ歸リ著玉ヘルナリ。是時ノフハ。父君自ラ書ツケ玉ヘル
日記モ有リ。然レド此ハ日ノ家内
ヲ記シ玉ヘルノミテ。世ノ文人等ノ。殊更ニ何怜ク可笑ク。書成タル物トハ。甚ク異
ナリ。又コノ上京シ玉ヘルヲニ付テ。同門中ノ人々。何クレト論ヒ言ヘルトドモ。多カルヲ。
凡テ藤垣内翁ノ。自ラ書ツメ置レタル一冊アリ。其ハ自ラノ文通ヲモ殘サズ。父君
ノ江戸ニ歸リ玉ヘル後マデノヲモ池サズ。悉ニ写記サレタリ。凡ソコノ上京一件ニ付
テ。同門ノ人々ノ情狀ヲ知ルニハ。甚能キ書ナリ。斯テ後ニ。父君ノ此ヲ見マシテ。
自カラ毀譽相半書ト書付玉ヘリ。其ハ此一冊。元ヨリ書名ノ无カリレ故

ナリ。扱ニタ後ニ聞タルヲ。世タルヲナドモ有。
 十二月吉田三位殿ヨリ。
 御同家附属ノ神職等ニ古道學ノ旨ヲ厚ク教導
 スベキ由ヲ頼ミ玉ヘリ。

同七 申甲

正月十五日。鍊胤入家。此春ハ殊ニ著述ヲ急ギテ。數
 部草稿ヲ成シ玉ヘリ。○每朝神拜詞ヲ增訂シテ。玉櫛
 ノ草稿ヲ改メ。第一ノ卷ヨリ。同ク九ノ卷ニテ增補シテ。舊
 稿ヲ廢シ玉フ。○黃帝傳記稿成。○五岳眞形圖說成。

同八 酉乙

○古史神代ノ傳。大抵草稿成レリ。○葛仙翁傳稿成。五十歲
 ○牛頭天王曆神辨成。入門十人

○印度藏志草稿十餘卷成。此中印度傳通品二冊清書 五十二歲
 成。○扶桑圖考初稿成。四月九日嫡孫ふき女出生。入門四人

同九 戌丙

○鑿宗仲景考刻成。○赤縣太古傳稿本成。五十二歲

○志都乃石屋。卷數多キニ依テ。體裁ヲ改メ分テ。數部ト爲玉ヘリ。入門十四人
 ○古今妖魅考清書成。○大扶桑圖考增補。及ビ三五 五十三歲
 本圖考等。次クニ稿本成。九月十三日嫡孫延胤出生。入門七人

同十一 子戊

○天柱五岳餘論成。○三神山餘考稿本成。五十四歲
 ○日知乃品定成。○每朝神拜詞記增訂本刻成。入門十六人

同十二 丑己

○宮比神御傳記刻成。入門十六人
 ○八卦誓疑傳稿本成。○欽命錄成。今年易曆ノ 五十五歲
 書類數部稿本成。七月六日孫胤則出生。入門二十人

天保元 庚寅

○春秋命歷序考成。○春秋曆本術編稿本成。五十六歲
 ○古史年歷編草稿成。○皇典文彙。及素讀本數部成。入門十九人
 ○大祓詞正訓刻成。

同二 卯辛

○弘仁歷運記考成。○万聲大統譜成。五十七歲

同三 辰壬

○玉ふき附

○十

天保四 巳癸	<p>○太昇曆旋式初稿成。 ○玉多須綾初帙刻成。</p> <p>二月十三日孫胤好出生。 ○前漢歷志辨成。 ○三曆由來記成。 ○夏殷周年表成。 ○日女島考刻成。</p>	入門十五人
同五 午甲	<p>○古曆日步式。同月步式。古今日契曆等稿本成。</p> <p>○皇國度制考成。 ○古今交蝕圖範草稿成。</p> <p>○孔子聖說考稿本成。 生田因秀ヲシテ欽命録ヲ注解シテ古易大象經傳ト改メ令メ至フ。 ○終古冬至格稿成。</p>	入門十二人
同六 未乙	<p>○赤縣度制考成。此書八屋代輪池翁ノ需ニ依テナリ。</p> <p>六月三日孫美加女出生。 十二月根岸新田ト云処ニ移リ住至フ。</p> <p>○三易由來記成。</p>	六十歳 入門十人
同七 申丙	<p>○八卦替疑傳ヲ増訂シテ太昇古易傳ト改メ至フ。</p> <p>○太昇古曆傳稿本成。 八月廿四日鏡胤及ビ家族門人等進</p>	六十一歳

同八 酉丁	<p>ニテ六十一歳ノ還甲ヲ賀ヒ奉ル。 十一月大扶桑國考上木成テ。 上野宮へ献ルガネテ 御尋有レニ依テナリ。</p> <p>正月十八日。 宮上意ニ先達テ平田篤胤献上ノ大扶桑國考ノ事。関白殿下へ申遣シタル処ソノ返事ニ右ノ書得ト披見イタシタルニ古來ノ事跡委ク考ヘテ心得ニ相成ベキト少カラズ甚大慶ニ存ジ候此書</p> <p>仙洞御所へ御進献候ハ。 御感オハシ坐ベクト申越タリト。 宮上意ノ旨御用人進藤周防守隆明主ヨリ申傳ヘラル。 二月六日又 上意ニ大扶桑國考ノコト。 関白殿下熟覽ニテ甚感心ナリ。 皇國ノ一ニ斯マデ厚ク盡カイタシタルト奇特ナリ就テハ</p> <p>仙洞御所へ御進献ノ事ハ申ス迄モ无ク。</p>	六十二歳
----------	--	------

○玉多須綾附

天保九 戊戌	<p>禁裡御所へモ、早く御進献ナサルベク必。 獻感有ラセラル可ク候。猶又 准后殿ヨリモ所望アリ。 別ニ部相添へ遣ハスベク旨、関白ヨリ申越シタリト。 上意有レ由、進藤周防守申傳ヘラル。 同廿一日、別製 本出来ニ付。 上野御殿へ差出ス。五月八日、先日ノ献本、兩 御所ニ於テ。 獻感不斜、自分ニ於テモ、大慶ノ旨、関白ヨリ申越シタリ ト。 宮仰せ出サレタル由承ハリ、白銀十枚賜ハレリ。甚ク 有難キ事ニコソ。 今年天朝無窮曆成ル。 ○幹支字原考成。 ○象易正義稿本成。</p>	入門七人
<p>今年五月ヨリ、改メテ秋田藩中ト成リ玉フ。 <small>○父君御本生ハ上ニ 示ヘル如ク、秋田藩士 大和田清兵衛、許島君ノ四男ニテ、御同姓正吉、胤行ト稱シ玉ヘルヲ、寛政七年、秋田藩士 江戸ニ出テ、同十二年、由有テ、坂倉家ノ藩士、平田氏ノ嗣子ト爲リ、平田半兵衛、萬歳</small></p>	六十三歳	

同十 己亥	<p>ト名告リ、通稱ハ大角ト改メ玉ヒ。文政六年マデ、同家ニ仕ヘ玉ヘルヲ、学業ノ成 ニ、不都合ノ一アルニ依テ、永ノ暇ヲ乞ヒ、浪人ト爲リテ、唯一向ニ学事ヲノミ 勉メ、勤シシ、玉ヘルヲ、今年ニイタリ、佐竹家ヨリ、其篤学ヲ稱美シ、玉ヒ テ、其筋ヲ以テ、帰藩スベキ由内命アリ、且本姓大和田ヲ稱スルニ及バズ、家 家トハ別段ニテ、此傳平田氏ヨリ、然ルベキヨシ。之ニ依テ、其命ニ應ジ、家 疎百石ノ積リヲ以テ、今天保九年五月十七日ヨリ、秋田藩中トハ成リ玉 ヘル。○文政六年致仕シ玉ヘル後ニハ、尾張殿、水戸殿、田安殿 等ヨリ、周旋徵招アリ、其外モ有ツルガ、尾州ヨリ、八月、俸 三人分、其餘品々、恩賜アリ、水戸ハ、哀公烈公ニバク、 恩顧モ有ツレド、其學風、大抵後世一家ノ習弊ヲ生ジ テ、古道ノ本旨ニ叶ハザルト多ク、或ハ讒者ノ爲ニ、志ヲ述ル 一能ハズシテ、數年ヲ經ラレタルトモ有キ、今更ニ要ナキヲナレ バ、委クハ爰ニ記サズ。 ○天朝無窮曆後編稿成。</p>	入門十五人
<p>○古史本辞經稿本成ル。 ○享和文化ノ頃ヨリ始メテ、數 十部ノ著書、草稿數百卷アルヲ、次々精撰ナシ玉フ。</p>	六十四歳	
入門六人		

○玉ふあまき附

天保十一
子庚

天朝無窮曆ノ事ニ付。司天臺ヨリノ疑問アリ。屋代翁取
次ニテ差越サル。依テ其答辨二冊ヲ記シ。同氏ヲ以差出し
至。司天家ヨリ再問無し。此答辨書ヲ以テ。無窮曆ノ附録トス。
六月■日幕府閣老ヨリ。身分御尋之節。本藩ヨリ御答。
平田大角儀を。因元出生之者ニ而。大和田清兵衛
四男ニ有之。若年之頃と。因学修行として。江戸
ニ出。追々出精ニ付。先年家來ニ召立。高百石宛行
學館へ入置。因学方申付置候。

六月

八月白川殿ヨリ。改メテ神祇道ノ學頭トシテ。附屬ノ神職
等ヲ厚ク教授イタス可キ旨。再應御頼アリ。
九月七日孫須受女出生。

六十五歳

入門五人

同十二
丑辛

正月元日。藩廳ニテ口達左之通。

舊臘晦日。幕府執政太田侯ヨリ。留守居役
御呼出ニテ。書附ヲ以御達左之通。

平田大角

六十六歳

右之者早く因許へ可被差遣候事。

猶又口達ニテ

右大角儀。是マテ著述書數多有之由。以來ハ
差留可被申候事。

右之通御達有之候段。被申渡。早く旅行用意イタシ。
因許へ罷越可申旨。承知仕候之ニ依テ。同月十一日。母君
御同道ニテ江戸出立シ。至ヒ。マツ本藩領分下野。因仁良
川陳屋マテ行キ。同所ニテ春中逗留シ。至ヒ。寒。因ユエ雪

○玉ふまき附

○十三

<p>天保十三 寅 壬</p>	<p>消ヲ待テ。四月五日同所出立ニテ。同月下旬。秋田久保田新町ナル。甥大和田盛胤が邸ニ著玉ヘリキ。<small>此頃ノ一書ナリ記アリト</small>斯テ鍊胤及ビ家族ノ者ハ。御構ヒ无之ニ付。一<small>此ニ用无</small>同江戸。表ニ住居レリ。叔マタ著述書ノ。右ノ通ニテ。以後ハ相止可申。是マデ出来之分ハ。其終ニテ不苦旨。藩廳ヨリ被申渡候。十一月廿四日。君公ヨリ改メテ。旗本近進ト云ニ召直サレ。俸祿ヲ増賜ハル。</p>	<p>入門廿九人</p>
<p>天保十三 寅 壬</p>	<p>六月。天朝無窮曆寫本六卷。鍊胤ヨリ。上野へ献上ノ処。宮御覽ノ上。容易ナラザル著述。天下ノ寶典タルベキ旨。深ク。御感賞アラセラレ。依テハ。京都へ御進献遊バサレタク。右之書一部。御所望之趣。八月十六日。御使ヲ以テ。本藩へ仰入ラル。十月廿二日。新寫本。扣ヘトモ二部。出</p>	<p>六十七歳</p>

<p>同十四 卯 癸</p>	<p>來ニ付。上野宮へ差上ラレ。早く。関白殿下へ御贈リニテ。間モ无ク。一部御傳献ニ相成タル処。獻感不淺之旨。京都ヨリ被。仰下タル由。十二月下旬。宮ヨリ御沙汰被成下。御賞美トシテ。金子三千匹。白縮緬二匹下シ賜ハリ。重疊難有仕合ニ奉存候。</p>	<p>入門廿八人</p>
<p>同十四 卯 癸</p>	<p>去シ丑年正月。御心ナラズモ。秋田ニ立玉ヘルヲ。鍊胤ハ江戸ニ留レル故ニ。其後ハ逢マツラズ。故。学業ノ用事日々ニ積リテ。凡ソ三年ニサヘ成ヌルヲ。面リ談ルベキノ多カレバ。必參ルベキ由宣ヒオコセ玉ヘルニ依テ。二男鍊弥ヲ連テ。六月五日ニ江戸ヲ立テ。同十九日ニ。御許ニハ參著タルナリ。然ルニ七月ノ中頃ヨリ。病玉フ処アリテ。醫師ヲ手ヲ盡シテ。藥ヲ進リケレ。驗ナク。次々ニ重リ玉ヒテ。閏九月十一日ノ夜ノ亥。</p>	<p>六十八歳</p>

○玉のまき附

○十四

刻頃ニナム。終ニ身下カリ玉ヒヨル。御齡ハ六十八歳ナリ。斯テ親族タチ弟子等相議リテ。十四日ニ家ヨリ東半里計ナル手形ト云処ノ廣澤山ト云眺望アル山ニ葬シ奉リヌサテ詠遺シ玉ヘル御歌ニ。詞書モ有テ。思フコト一ツモ神ニ務メラヘズ。今日ヤマカルカ惜コノ世ヲト有リ。

本藩ヨリ御召立之節御書付

大和田正治叔父
平田大角

皇朝古道學精勤。數十部之書著述いゝ右著書。先年上京之節。

禁中 仙洞御所迄也。

獻覽ニ相成候上。拜領物等被 仰付。且江戸表ニおいて。公迎御内覽ニ相成候段。積年之勤學

骨折之儀亦有之候。猶追々門弟多人數了及以。當時ニ至候也。諸國之同學莫太亦相成候也。畢竟學業拔群故と。思召候。依之御旗本ニ被 召出候旨被 仰出候。

十一月

八月七日孫胤雄出生。○東脩之門人凡五百五十三人。此ヲ上卷ノ門人トス。此餘没後ノ門人多シ。其ハ末ニ記シ出スベシ。

○著述之書凡百餘部。卷數千卷ニ近カルベシ。但シ此ハ究テハ言ヒガタク。只大凡ヲ云ルナリ。然ルハ數十葉ノ物ト云ヘドモ。此ハ猥ニ世ニ出ス可カラズト掟テ玉ヘルモ有リ。其ハ固ヨリ著書ノ例ニ入レズ。又始ヨリ書名ヲ題シテ。五枚七枚記出サレタルモ數有リ。又只一部ニテ。數百卷ノ物モ有リ。又僅ニ十葉ニ足ラザル一部モ有レバ。左ニ右ニ。卷數部數ノ容易ク

定メ言ヒ回キヲ思フベシ。扱又暇アラバ。著述ノ系図ヲ
書ク可シトモ宣ヘリキ。然ルハ早ク世ニ弘マリタル。學ビト
云学ビ。道ト云フ道ノ事ハ。大抵洩スヲ无ク。議論シ玉ヒ
テ。彼ニ依テ此書成リ。此ニ就テ某書ノ出来シ事ナド。皆
由緒アルヲニテ。唯不意ニ。著述ノ成レルト云フハ无キ理ナ
リ。然レバ系図アラバ。大ニ便宜シカルベキヲ。其事ノ成ラザリ
シハ。イト惜シクコソ。校者云。世ニ鈴屋大人ノ著書バカリ。文字遣ヒノ正シク。
辨裁ノ宜キハ有ルヲ无キヲ。猶其上ニモ。正字ヲ多ク
用ヒテ。仮字書ヲ省キ。紙頁ヲ少クシテ。櫻木ノ災ヲ減シ。造化ノ功德ヲ妨ゲ
ジト。勉メテ著述シ玉ヘルヲナレバ。大方ノ人ノ十卷ハ。大抵三四卷。若クハ五六卷
ニハ。書取玉フベケレバ。百餘部ノ著書ハ。世ノ人ノ十
部ニモ對フ可シト。想フト云リ。此ハ家ニ然ルベシ。○鏡胤云。著書ノ數
多カルニ就テハ。心得置ベキ事アリ。然ルハ敏ク成テ。其說粗
キモ有リ。遅ク出来テ。精キモ有テ一様ニハ言ヒ回ク。サレド
大凡ハ。讀見レバ直チニ辨ヘ知ラル。トナレバ。今此ニ委レクハ

言ハズ。其中ニ古史傳ハ。最第一ノ書ナルガ。神世三十卷計リ
ノ中ニ。撰述ノ遅速。考說ノ精粗モ有リ。自ツカラ書中。文脈
ノ異ナルモ有ルヲナルヲ。其ヲ知ラザル者ハ。訝リ思フモ有ベケ
レバ。今其大概ヲ爰ニ云ベシ。其ハマツ第一段ヨリ。十段辺マデハ。
文化九年頃。初稿成タルヲ。文政ノ五六年頃ニ至リ。一通リ
書改メ玉ヘル也。同十一段ヨリ第六十段辺マデハ。文化ノ十年
頃ヨリ。文政ノ元年頃マデニ。次々書玉ヘル初稿ノ終也。又文
政ノ三四年頃ニハ。印度藏志。妖魅考ナド。專ト書著シ玉ヘ
リキ。斯テ其時クニ。考得玉ヘル說アル時ハ。其処クニ書入改
メ玉ヘルモ有ニ依テ。其前後文意ノ昭應セザルモ間アリ。豫
テハ赤縣太古傳。印度藏志等。凡テ外圖ノ古傳説ヲ。詳ニ
探索考究シテ。其成タル上ニ。古史傳ハ悉ク。考證精撰シ玉

フ可キヲニ定メ置レタルヲ其事迄ニ至ラザリニハ甚モしく
口惜キヲニコソ然レバ後ニ成タル天朝無窮曆古史本辞經ハ
更ナリ其餘赤縣太古傳及ビ易曆ノ著述等ハ却リテ古
史傳ヨリ考證ノ委キヲ多シ然レバ皇國神代ノ真古傳ハ
彼ニ依テ其源旨ヲ伺得ルヲモ少カラザルナリ此ハ讀者必
心得居ルベキナル故ニ因ニニ爰ニ記シ出セルナリ。

○弘化二年乙巳三月白川神祇伯王殿ヨリ父君御一世ノ学
業ヲ稱美シ玉ヒテ神靈能眞柱大人ト云フ謚号ヲ贈ラレハ
夕靈神ノ稱号ヲ贈リ玉フ。○文久二年壬戌正月改メテ靈
社号ヲ贈リ玉フ。

○御没後天保十五年甲辰ヨリ慶應三年丁卯ニ至入門
之者一千三百三十八コレヲ中等ノ門人ト爲ス。

○每朝神拜詞

是乃神牀尔神籬立氏招請奉里令坐奉里氏日尔
異尔稱辭竟奉留挂卷毛畏伎天出御中主大神高
皇產靈神皇產靈大神乎始奉里天御神八百万罔
御神八百万乃神等大八島出罔く島く所く出大
小社く尔鎮座坐須千五百万乃神等其從閉給布
百千万出神等枝宮枝社出神等一柱毛漏落給布
事無久辭別氏波幽事知看須大罔主神大罔魂神。

大物主神オホモノノカミ醫藥イヨク出術イデ登ノボリ呪禁ノヒナヒ出術イデ斗ト尔ニ幸賜イサハシメ布フ少毘シウヒ
古那神コナノカミ别ワケ尔ニ波ハ真マ笈ス刈カ信濃シノノ因ヰ伊都イド速ハヤ伎キ浅間シマノ山ヤマ尔ニ
鎮坐シヅマリ須ス磐長イハナ比賣ヒメ神カミ尔ニ副ソヒ氏ノ守モ良須ラス日ヒ津高ツカ根王ネノミ
命乎始ミコトヲハジ米氏メノミ天翔アマガケリ因ヰ翔ケル留モロク諸蕃モロクカラヤマト倭出ノ山人ヤマトノタチ等ト總スベ氏ノ世ヨ
尔ニ在アリ斗志トシ在レ雷カミ諸出モロクノ御靈ミタマ等ト出タ正志マサシ伎限キリヒト一柱イツツラ毛漏モロ
落給オチタマフ布事フコト無久ナク有由アラユル雷カミ大神オホカミ等ト御靈ミタマ等ト出タ盡ツク招奉マツル雷カミ
麻アサ之ノ邇ニ奇靈キレミ神カミ憑ツク里サキ幸閑イハヒ給閑タマフ登ノボリ令坐シマシ奉里マツル氏ノ天アメ
勝因カツヰ勝奇靈カツキレミ千憑チヨリヒコ彦命ヒコノミコト登ノボリ稱名ナナフ令負シマシ奉雷マツル曾富ソノホド登神ノボリカミ

亦名者久延マタノミナハク毘古命ヒコノミコト乃御前ノミマヘ尔ニ平阿曾美ヒラアソノミ篤胤ツクネ齋清イハヒヨシ
麻波里マハリ赤伎清アカキキヨ伎心計キココロバカリ乃禮代斗ノレハイト御酒ミキ御饌ミケ御毛比ミモヒ
獻里氏タテミツリノミ鹿自物カグレモノ膝折ヒザガリ伏世フシノ鵜自物ウジモノ頂根タテネ突拔ツキス伎慎美キツシメ
禮麻比レマヒ拜美奉里氏ヲロガミツリノミ畏美カレシメ畏美カレシメ毛白須モウラス過犯須事アヤシチオカコト乃ノ
在アル乎婆ヲバ見直志ミナホシ聞直志キナホシ給比罪タマフツミ怠有乎毛オコタリアルモ宥給比許ナゲメタマフヒヨシ
給比氏タマフヒノミ此獻留物等受給比モノドモウケタマフヒ今祈願白須事等乎イマノヒノミヲラノトドモノ平ヒラ
祢久安ネクヤスラケ祢久聞召世斗ネクキコレメセト白須ウラス篤胤ツクネ伊怯イナク久劣クナカレ在アル杼毛シモ
賀茂縣主カモノアガタヌシ真淵平阿曾美マヒラノアソノミ宣長等ノリナガラ我ガ古學尔コガクニ功績在イサヲシカリ

志導^シ爾^ニ依^リ氏^ヲ神^カ世^ヨ乃^リ御^ミ典^ヲ乎^ヲ讀^ミ窺^ヒ比^ヒ奉^リ里^ヲ氏^ヲ在^ル尔^ニ天^ヲ
地^ヲ乃^チ初^メ發^メ迺^リ時^キ尔^ニ高^カ天^ノ出^ノ神^ヲ祖^ヲ天^ノ御^ヲ中^ノ主^ヲ大^ニ神^ヲ高^カ皇^ヲ
產^ム靈^ヲ神^カ皇^ヲ產^ム靈^ヲ大^ニ神^ヲ高^カ天^ノ原^ノ尔^ニ事^ヲ始^メ給^ヒ比^ヒ氏^ヲ神^カ伊^ハ邪^ハ
那^ナ岐^ギ伊^イ邪^ザ那^ナ美^ミ命^ヲ尔^ニ是^レ漂^ル在^ル圀^ニ乎^ヲ修^リ固^ク成^ル世^ヲ登^ル天^ノ瓊^ヲ
矛^ヲ乎^ヲ事^ヲ依^リ志^ヲ賜^ヒ比^ヒ氏^ヲ伊^ハ邪^ハ那^ナ岐^ギ伊^イ邪^ザ那^ナ美^ミ二^ニ柱^ニ大^ニ神^ヲ其^レ
瓊^ヲ矛^ヲ乎^ヲ指^シ下^ニ志^ヲ畫^キ成^ル給^ヒ比^ヒ氏^ヲ淤^ル能^ク基^ヲ呂^ヲ島^ヲ尔^ニ天^ノ出^ノ御^ヲ
柱^ヲ圀^ニ出^ル御^ヲ柱^ヲ登^リ見^ル立^テ給^ヒ比^ヒ氏^ヲ八^ノ尋^ノ殿^ヲ乎^ヲ化^シ作^ル給^ヒ比^ヒ妹^ヲ
妹^ヲ二^ニ柱^ニ所^ヲ就^テ給^ヒ比^ヒ氏^ヲ大^ニ八^ノ島^ノ乃^リ圀^ニく^ク島^ノく^ク乎^ヲ生^ル給^ヒ比^ヒ氏^ヲ

青^ア人^ヒ草^ト乃^リ始^メ祖^ヲ神^ヲ等^ヲ乎^ヲ生^ル給^ヒ比^ヒ氏^ヲ万^ノ物^ヲ乎^ヲ毛^ヲ生^ル給^ヒ比^ヒ青^ア
人^ヒ草^ト乎^ヲ惠^メ給^ヒ比^ヒ氏^ヲ布^ヲ登^ル諸^ヲ乃^リ神^ヲ等^ヲ乎^ヲ生^ル給^ヒ比^ヒ氏^ヲ其^レ御^ヲ態^ヲ乎^ヲ
別^ヲ依^リ志^ヲ給^ヒ比^ヒ氏^ヲ万^ノ出^ル事^ヲ乎^ヲ始^メ給^ヒ比^ヒ氏^ヲ爲^シ登^ル爲^シ志^ヲ勤^メ美^メ給^ヒ比^ヒ氏^ヲ
閑^ヘ留^ル事^ヲ每^ニ尔^ニ天^ノ皇^ヲ祖^ヲ神^ヲ等^ヲ乃^リ大^ニ御^ニ心^ヲ乎^ヲ御^ニ心^ヲ登^ル爲^シ比^ヒ氏^ヲ
青^ア人^ヒ草^ト乎^ヲ惠^メ給^ヒ比^ヒ氏^ヲ愛^シ志^ヲ美^メ給^ヒ比^ヒ氏^ヲ彌^メ益^メ尔^ニ蕃^ニ息^ニ里^ヲ榮^ニ由^リ
倍^ベ久^ク功^ヲ竟^ル給^ヒ比^ヒ氏^ヲ閑^ル留^ル乎^ヲ始^メ米^ヲ天^ノ照^ラ大^ニ御^ニ神^ヲ其^レ御^ヲ業^ヲ乎^ヲ受^ケ
持^モ給^ヒ比^ヒ氏^ヲ天^ノ御^ヲ圀^ニ知^ル看^ル志^ヲ穀^ヲ物^ヲ乃^リ種^ヲ等^ヲ御^ヲ覽^ル志^ヲ比^ヒ氏^ヲ此^レ
物^ヲ等^ヲ波^ヲ宇^ヲ都^ヲ志^ヲ伎^ヲ青^ア人^ヒ草^ト迺^リ食^ヒ氏^ヲ活^ク倍^ベ伎^ヲ物^ヲ敘^ル斗^ヲ詔^ヲ

給比氏殖生志賜比天出下乃荒振神等乎神攘く
給比語問志岩根木根立草乃片葉乎毛語止氏幽
冥事波八百步杵築出大神尔言依志治志米給比
皇美麻命乎天都高御座尔令坐奉里給比氏万千
秋乃長秋尔大八島乎安圀斗平氣久治給開登天
降志任奉里羸明事知看佐志米賜閉利斯時尔神
魯伎神魯美命乃御言依志坐流天祝詞迺太祝詞
尔依氏皇美麻命能御く世く天神社圀神社乎齋

比神祭袁專登爲氏天乃下乎治賜比人民袁惠給
比撫給布事奈毛天皇祖出大神乃御傳坐留大道
乃根元尔氏其御任乃麻く邇く天神地祇等受持
給比氏世中乃事迺有乃悉神出御業尔洩留く事
無久脱留事無久廣伎厚伎恩賴乎蒙里氏在留縁
由袁多斯尔窺比得氏頂尔尊美辱美氏在乎中御
世與利外圀く乃横趣乃說等傳波里來氏世人乃
心漸尔其方風尔移呂比氏異伎卑伎蕃神乎良專

登齋伎高久尊伎皇神等乃御靈尔依氏其御道乃
中尔生礼氏食物衣物住家等爲斗爲須事每尔大
御惠乎蒙里都々毛然波思奉良受神乃道乎粗畧
尔思居留人多尔出来氏神事仕奉留事乃廢礼以
來氏天神社因神社毛衰閑坐留尔依氏皇神等波
彌放里尔放坐氏在坐奴碁登隱呂比坐蕃神波所
乎得都々大神僭比氏世人欺久事能憤悒呂志久
慷慨久身尔敢奴態尔波在礼社神乃御典乎熟解

明志氏世人尔普久大神等乃御德乃辱伎本乃由
緒袁知志米靈能眞柱立固志米氏猶此後毛何様
乃異伎說等蔓里來斗毛率良世自登思比興志氏
往斯文化八年斗云年乃十二月余里間無久閑無
久今日乃活日迺足日麻傳心者緩怠流事無久此
學乎勤美仕奉良牟斗志邪斯侍布尔奈毛今招奉
里稱辭竟奉留天地出大神等御靈等一柱毛漏落
給布事無久此乃神林尔神集々給比平祚久安祚

久御座坐氏神魯伎神魯美命乃高天原尔始賜比
志事乎天地乃大神等神隨毛知看氏任乃麻之邇
邇幸開坐志荒振神等御靈等波皆御心乎直志和
斯坐氏善志伎御心振起給比中御世余里人乃隨
意尔行波志米或波神隨毛宥給比氏用給開留蕃
罔之乃事等乃神魯岐神魯美命乃道尔違開留非
事波糾志改米退祢給比天地乃大神等神世乃毛
許呂大御稜威乎振比給比各之掌別給布功德乃

任尔相宇豆那比相麻自許里相口會給比氏前尔
神出道乎不知志程尔過犯世留種之乃罪怠穢今
毛仍日之尔失犯須事乃在乎婆見直志聞直志給
比宥給比許給比拂清米志米給比氏古語等波漏
須事無久過事無久正語乎正語斗思得志米給比
說誤礼留事有良婆次之尔思得氏令改給比足者
不行杼毛天下乃事等盡尔令知給比外罔說尔麻
礼正說波正說登撫得志米給比高天出神祖乃神

出產靈尔造給比。其御靈乎分賦。閉留御末奴斗爲
氏。其道好牟性斗令在給布事波頓氏神乃如此使
給布事斗那毛思奉留尔。挂卷波畏祁礼杼毛。吾魂
波頓氏神乃分靈尔志在礼婆幽事神事乎毛。知良
流く限波令知給比氏。此世奈賀良尔神尔毛見奉
里。世乃爲道乃爲尔。祈里登禱留事等爲斗爲須術
等神習出術鑿藥出術呪禁出術乎。悉尔神術奈須
伊豆速伎驗有志米給比氏。昔久人乃災難乎令救

給比。所有妖物毛形隱志敢受恐怖礼志未給比。我
無久一向尔。歸順奉里仕奉礼婆。此軀即奇靈千憑
彦命尔等志。大神等御靈等。常尔請吞奉留隨尔。靈
幸閉坐神憑坐氏。其御德尔令似給比。大神等乃御
靈出幸請奉留斗。御前尔捧宜氏。日每尔給波留活
藥乃驗炳焉久。傳給布隨尔。軀乎健然尔。病志伎事
無久煩波志伎事無久。彌若尔令若給比氏。堅石尔
常石尔。世尔弘久功成竟留麻傳。世乃長人斗在志

米給比學乃業乎彌獎尔進米給比彌助尔扶給比
氏牟久佐加尔榮志米給比五百卷千卷乃書等言
美志久義理正志久記得志米給比爲事言事悉尔
令愛敬給比外囿學乃佞曲礼留徒乃邪說波次く
尔問和志言向志米給比此正道尔赴志米給比氏
諸同心尔神習波志米給比仍神出道尔歸順波傳
四方四隅余里荒備疎備來牟妖鬼枉人波速尔追
退祁罰米給比氏例乃隨尔豫美都囿尔逐比下志

給比大神等乃御稜威乎世尔炳焉久令知給比書
著佐牟書等乎阿夫佐波受形木乃板尔彫成氏世
尔令弘米給比治礼留御世乃祥尔神世乃由緒乎
普久廣久滯留事無久善波志久世尔解明佐志米
給比世人盡尔正志伎直伎古意尔復良志米給比
仍其書等乎最高伎雲乃上尔毛世乎爲政給布公
邊尔毛伊吹舉志米給比廣伎厚伎御德乃公心尔
庸夫乃思乎毛徒尔波捨自斗採用給比神世乃由

緣乎所思坐氏次く尔廢礼多留神事乎令與給比。
衰坐留社く乃千木高久令舉給比。古道尔復志給
比氏無窮尔君斗臣斗乃御中彌睦備尔親備令榮
給比此功績乎以氏罪怠穢犯乃有乎毛宥給比怒
志給比氏大神等乃御恩乎報伊志米給比功成竟
氏現世乎罷礼留後乃魂乃往方波定乃麻く邇く。
産土神等事執給比氏一向尔幽事知須留大神乃
御許尔參里仕奉良志米給比大神乃御後尔立氏。

天上尔復命白佐志米給比彌益く尔正志伎直伎
太心乎令固給比氏動久事無久天地乃有年限乃
後世乃次く毛現世尔立牟功績乃隨尔神世乃學
乎世人尔幸閉志米給比氏邪乃道乎紕志辨閉伊
吹拂比平退久留態尔仕奉留神斗成志米給閉又
其尔就氏波常毛家内乃者共朋友親屬教子等乃
乃乃枉事罪穢乎毛拂給比清給比氏病志伎事無
久煩波志伎事無久睦備親美諸く義理尔叶閉留

願事共波幸閉給比氏同心尔。大神等乃大道乎。説
弘牟留功勞乎扶志米給比。御歳豐尔。世乃富世乃
饒乎毛不足事無久令得給比氏。人多尔令養給比。
神習波志米給閉斗。日波異礼杼毛心言波違閉受。
清伎赤伎心乃麻く邇く。偽良受節良受祈祝伎請
願奉留事由乎。天御柱因御柱命御息乃共走出留
駒乃耳彌高尔。天都神者。天出磐門乎推披伎氏聞
食志米。因都神者。高山乃伊總理。短山乃伊總理乎。

播別氏聞食志米。天翔因翔留山人等。諸出御靈等。
天勝因勝奇靈千憑彦命尔。聞食志米給閉登畏美
畏美毛白須。

神拜詞ハ最初ハ文化十三年刻成本ノトホリヲ用ヒ至ヘルガ
次ク趣意増加シテ終ニ文政四年ヨリ此詞ニ改メ至ヘルナリ。

○文政六年上京よて、富小路殿へ著述書類差上らゆ時、歌を詠て
添玉へ、其歌ふ「ふ」し世は眞心志ぬぶ學び草於み見む事多君
お任せ」と書て出し玉ひれば、治部卿殿御返し、「千磐破神世は道
の學び草於み見て誰もを借榮え々」とあし下し玉へり。此事
前お過ちて、記し脱せる故。あふ書於く。
○父君は秋田小下玉へるや、出因後凡そ五十年も近く、親族の多
加縁を云までも無く、殊も兄弟八人おをあぐ故。甥姪あど數めて、

指折てハ計へめ尽されず斯て文化もいまど能く開けざる土地を
れむ父君の御下りを珍おみて門人等ハ更よも云ハ父重職大身
る方よ也日限字定をて招うれ玉ハ或ハ此方へ訊れハ入門を願
ふも有り講説を乞ふも有て日く少くも休らひ玉ふほき暇ふし
然のみあらばくもしれ術をどめいまど開けざるみや醫師等の
ふし不得て悩み煩ふ人々の有々る中ハ藥を與へ玉ひて忽ち癒
ふも數阿て何れも神れ如しと尊み悦びあへりとぞ斯て此事達
近ハ聞えたる故也そよ也難病人ハまど連來て一向ハ憐
愍を乞ふいふとも爲方無く其断りハ困て果玉へりとぞ然きど
おも本業も非ざはが上ハ醫師ふて門人と成ゆるも四五人有れ
ハ夫等ハ藥方を傳へ授て直さしを玉へるも數ありき右れ如く
晝夜奔走ハ暇なく所ハ下所御身ハ一たふて逃も隠れもいべきや

う無く書物見玉ハ隙もあく殊ハ七十近き御齡なれど御勞きも
いふ有らむと心厚き人ハ淡く案じ奉りていふで鍊胤ハ敏下アて
扶け奉れと密く云ひおこせし人も有々る故也己いそだて下ハは
あも然るを程も無く病つき玉ひて終ハ亡あり玉へるも何とも爲方
なく返をく哀き事ハこそ凡そ秋田ハ坐たる程終ハ三年よめ足
らざる事ハて親族門人らハ更よも云ハ父知るも知らぬも遠近ハ
並て惜み慕ひ奉ゆる事ハ己も既ハ見聞ハ及へる処ありかくて鍊胤
母人と共ハ翌る辰の年までは久保田ハ居れど學問の爲ハ宜ハ
らざる事ハはが上ハか終て宣ひ遺し玉へる事ハハ依て去り
くハ所思れど御暇まをして三月廿日頃母人一同立出て四月の初ハ
ハ江戸鳥越ハ家ハ歸てぬ

右ら別よ委しく記せる物あれハ爰ハ大凡を云はみぞ

○御在世の門人及び御没後此入門の員ハ既よ上お記せり死斯て御一新後去し戊辰の春此初老より今年己巳の六月末はて西京及び此地ひて入門此人合せて一千四百廿四人あり但し右いおのれ門人おと云ふことよハ何れど鍊胤不肖自から學び得ざりと思ふ事一おも無く皆先考此遺教を傳ふるれみ夫故よ其よし申断りて悉く先人没後門人とい稱するあり

明治二年己巳七月中旬東京表三番町の旅館お於て之を記す

從六位侍講兼大學一等教授平朝臣鍊胤追記

右父君御一代畧記及び毎朝神拜詞ハ先年清書あり置あるを今度玉多須幾の附録おせよと勸むる人多たお依て即巻尾おハ附くるあり

鍊胤追記

彫工東京 木邨嘉平房藏

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目 塾藏版

- 古史成文 神代部 三卷 ○古史徵 神代部六册 問題記五册 十一卷
- 古史傳 自初卷至廿八卷 七秩刻成 ○古史本辭經 五十卷 義訣 四卷
- 神代系圖 折本 輸入 一帖 ○同 小折本 一帖 ○同 柱軸料 一枚
- 靈能眞柱 二卷 ○神拜詞記 折本 一帖 ○玉多須喜 帙 十卷
- 太元圖說 石指 一幅 ○古語拾遺校訂 一卷 ○万聲大統譜 一幅
- 祝詞式正訓 二卷 ○神字日文傳 疑字 編附 三卷 ○度制考 二卷
- 弘仁歷運記考 二卷 ○大祓詞正訓 折本 一帖 ○古史年歷編畧 一帖
- 天津祝詞考 一卷 ○鬼神新論 一卷 ○學神号 石指 一幅
- 春秋命歷序考 二卷 ○入學問答 附著述 書目 一卷 ○大杖桑園考 二卷
- 赤縣太古傳 帙初 三卷 ○赤縣太古傳成文 一卷 ○三五本園考 二卷

○刻成書目

○全

- 三神山餘考 一卷 ○古今妖魅考 三卷 ○古道大意 講本 二卷
- 俗神道辨 講本 四卷 ○靜乃石屋 同 二卷 ○西籍概論 同 三卷
- 出定笑語 講本附錄 凡六卷 ○伊吹於呂志 同 二卷 ○悟道辨 同 二卷
- 牛頭天王曆神辨 一卷 ○童蒙入學門 一卷 ○三易由來記 二卷
- 鑿宗仲景考 一卷 ○太界古易成文 一卷 ○太界古曆成文 一卷
- 大道或問 一卷 ○皇典文彙 三卷 ○赤縣歷代尺圖 一枚
- 古學二千文 讀例付 一卷 ○古易大象經正文 一卷 ○說文解字序 一卷
- 宮比神御傳記 御影付 一卷 ○天滿宮御傳記略 二卷 ○日女島考 一卷
- 古道訓蒙頌 一卷 ○神德畧述頌 一卷 ○叶古要略 一卷
- 荷田翁啓文 一卷 ○草木撰種錄 一枚 ○魂魄分屬圖說 附 一幅
- 祭典略 祭文例附 一卷 ○千字文 一卷 ○諸職祖神号 附 數種
- 神字原五十音 一枚 ○皇祖宮所考 一卷 ○故大人遺訓措物數種

837
10
86

平田先生講本

玉多須幾

全十卷

氣吹舍塾藏版

